

尾崎喜八資料

第 4 号

特集 尾崎喜八と信州・富士見高原

女のトルソ・大煙突／尾崎喜八———2

尾崎喜八氏とドイツ詩人／富士川英郎———3

研究と資料———6

富士見日記から／昭和三十四年

「富士見日記から」の前後に妻実子、娘栄子に送られた葉書／昭和二十五年

信州の高原三景／昭和三十一年

山を想う／昭和二十四年

句誌「白樺」の選及び講話／昭和二十五年頃

雪の高原で／昭和二十六年

富士見の夏草の果てに／昭和三十五年

高原にて／昭和二十七年

*

尾崎喜八と信州・富士見高原 関連資料———23

高原の詩人 尾崎喜八／「新女苑」昭和二十七年七月号

農村と協同精神／町田梓楼、昭和二十七年七月

尾崎喜八と信州・富士見——昭和二十一～二十七年の交流記録／嘉納忠明

*

新聞・雑誌掲載目録(四)、昭和二十一年～三十四年———28

同・附記／嘉納忠明

この一年のできごと／その他———32

*

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

1988年2月

女のトルソ

女のトルソは台の上に
まろく、ふとく

がつちりと、のびやかに

豊満な肉は

岩畳な骨組をつゝみ

しなやかに、あかるく

きつぱりと、ほがらかに

春のはなさく

薔薇のつぼみの微妙さにいきづく

一ぼんのいのちあつて

胴体を上下につらぬき

いのちの力は体軀にみちあふれ

さかんなる気魄

かすかにふるふ

張り切つて豊かな胸の平野にをどり

もりあがつた乳房の丘をめぐつて

その麓にまどろむ光は

ふたゝび目ざめて腹にひろがり

たはむれては眠り

たはむれては眠り

やがて羞耻をつゝむ内股のふかみに

はるかに消え入る

あゝ、女のトルソ

万人の母なる

自然の大建築

春の花、春の土壌

うねり脈うつ海洋の波

もろもろのいのちはこゝに芽ぐみ

愛はかゞやかにこゝにそだつ

讃嘆をつくして及ばぬもの

愛撫をきはめてみちたらぬもの

甘美にみのり

莊大に高まり

美醜を絶して自然そのものであるもの

私はロダンのトルソの前にひざまづく

大煙突

ある人に

生活につかれたら来て見たまへ

「蔵前」の三本の大煙突を

天空を摩してならび立つ大煙突を

このごろの初夏の晴天なら

淡碧に微動するおほぞらの海を

遠く航する煙りに似た雲の群が

そのヒーロイックな頂きを飛ぶであらう

まつさをにけぶる五月の雨の中

その薄紗の被幕をつらぬいて

思はぬ頭上にのしかゝり

あくまでもふとく

あくまでもたかく

モンスター^(モンスター)のやうにつつたつ大煙突

恐らく君は

その圧迫にいきづまつてしまふであらう

むくむくと盛り上る雲の群を背景としては

かぎりなく莊大に

星々の一斉に歌ふ夜空にそびえては

かぎりなく静寂に

つめたく朗らかな朝明けをむかへ

とほくなつかしい落日を見おくる

風は郷愁の悲曲を高く吹きめぐるし

日は燦として永劫の天空に輝きわたる

その中に堂々とそびえ立つて

死せる巨人の姿のやうな

まつくろな大煙突

なさけなくなつたら来て見たまへ

「蔵前」の三本の大煙突を――

君は

何かしら大きな感じをつかむだらう

そして

多分その女々しさも消え去るだらう

「生命の川」大正六年六月号／P 31「解題」参照



尾崎喜八氏とドイツ詩人

富士川英郎

尾崎喜八氏とドイツの詩人たちとのつながりは、先ずドイツ音楽を通じて結ばれた。音楽に一方ならぬ造詣と嗜好をもっていた尾崎さんは、ドイツ音楽では、バッハやモーツァルトなどのほかに、シューバートやヴォルフの歌曲を愛していた。そして彼らの作品を通じて、アイヒENDORFやメーリケなど、ドイツ浪漫派の詩人たちの詩を知り、しばしばそれを口ずから歌うことによつて、それに親しんでいたようである。また、のちには、メーリケの「ランプに寄す」という詩のように、親ら筆を執つて、その翻訳を試みたこともあった。

尾崎さんがヘッセに傾倒したことは周知のところであるが、これもそれ以前に尾崎さんがドイツ浪漫派の音楽や詩を愛好していたことと関係がある、というよりはその延長線上にあることだと言ってもよい。なぜなら、十九世紀末から二十世紀前半へかけて現われた詩人たちのうちで、ヘッセはドイツ浪漫派の詩の最も正統的な継承者であつたからである。

尾崎さんが初めてヘッセを知つたのは、片山敏彦氏を通じてのことであり、その「ヘッセを読みたい一心から」ドイツ語の勉強をはじめたという。それは昭和二、三年頃のことであつたらしく、尾崎さんは先ずヘッセの二冊の詩集を読み、そのなかに収められていた多くの詩に深い共感を覚えたのであつた。尾崎さんはそれ以前、第三詩集の『曠野の火』を出した頃までは、主としてホイットマンやヴェルハーランから強い感化をうけていたが、

ヘッセに傾倒してからは、その詩に新しい変化と展望が現われてきた。そして尾崎さん自身、その間の事情を、「私のヘルマン・ヘッセ」という文章のなかで、次のように語っている。

「それまで私はホイットマンやヴェルハーランの詩に没頭して、彼らの明るい雄々しい詩精神から深い感化をうけていた。そしてすでに出版された処女詩集にも第二詩集にも、また当時書きためていた第三詩集『曠野の火』の中の作品にもその影響があらわだった。ところがヘッセのうちに見出したものはそれとは違つていた。前の二人が男性的、汎神論的であるに引きかえ、ヘッセの方はいわば女性的で、人間味豊かで、私の生来の氣質や傾向に無理なく柔らかく通うものを持っていた」。昭和八年に出た尾崎さんの第四詩集『旅と滞在』は、ドイツの「インゼル文庫」本に倣つたその装幀がすでに語つてゐるやうに、尾崎さんがドイツ詩からうけた感化が顕著に見られる詩集で、そこにはリルケに影響された二、三の詩も見出されたが、しかし、影響の強さから言えば、やはりヘッセからうけたそれがいちばんであつたろう。殊にそのなかの「夕べの泉」というヘッセに捧げられた詩は、その感化の真只中から生まれたやうな詩で、この詩の独訳をうけとつたヘッセは喜んで、「その返しとして自作の『無常』という詩と、同じ題をつけた一枚の肉筆の水彩画」を、尾崎さんに送つてきたという。

尾崎さんのヘッセへの傾倒は、その後の生

涯を通じて、渝りなくつづき、その間に多くのヘッセの詩を翻訳して一冊の『ヘッセ詩集』を出したほか、『絵の本』やその他のヘッセの散文も愛読して、そのうちの幾篇かを翻訳した。とりわけヘッセの美しい詩文集であり、また、詩画集でもある『ヴンデルング』は、尾崎さんが昭和十四年以来、たびたび翻訳を試みたもので、その最後の昭和三十三年に朋文堂から出版された瀟洒な訳本は、原書にあるヘッセの十三葉の水彩画の複製をすべて収めた楽しい書物になっている。

昭和三十九年に創文社から出版された『画と随想の本』は、尾崎さんがヘッセの『観照録』『絵の本』『テッシンの水彩画』という三種の随筆集のなかから特に愛好する十八篇のエッセイを選びだし、それを翻訳して、原作の執筆年代順に配列し、その間にヘッセの美しい水彩画八葉の複製を挿入したものである。これはその外装も内容ともに大へん美しく、楽しい書物であるが、この本にはヘッセに対する尾崎さんの永年にわたる讃称と敬愛と共感の心がこめられていて、ほとんどこのふたりの詩人の共著ではないかと思われるほど、一種のアンティームな気分が全体にただよっている。これは尾崎さんとヘッセの結びつきの窮極の豊かな実りを示している書物である。

尾崎さんをヘッセに結びつけたのは、前にも言った通り、ドイツ浪漫派の正統を継いだ詩人ヘッセの生来の素質と、その詩心であり、また、自然への愛であったが、他方、老子に傾倒し、禅に関心を寄せ、易に興味を持った

ヘッセの一面には、尾崎さんはそれほどの共感を持たなかったようである。

いずれにしても、尾崎さんとヘッセの結びつきは周知のところであるが、尾崎さんが晩年に、同じように、カロッサに傾倒したことは、あまり知られていないのではなからうか。

尾崎さんがカロッサの詩や散文に親しんだのは、戦後まもなく、信州富士見の高原で、『貧窮に洗われ、孤独の味を噛みしめながら』生活していた頃のことと、「緑いろの布表紙のカロッサの『詩集』」を「渴した者が飲むようにして」読んだという。それ以来、尾崎さんにとってカロッサは、「一と月に二度か三度は、詩であれ小説であれ、必ずその幾頁かを読み返さずにはいられない」最も愛と尊敬とに価する現存の詩人となったのであった。従って一九五六年（昭和三十一年）九月十二日に、カロッサがドイツのパッサウに近いリットシュタイクで死んだという訃報に接したときの尾崎さんの衝撃は大きかったらしい。そして早速、雑誌「季節」の昭和三十一年十二月号に、カロッサを悼む文章と、「女囚と老人」というカロッサの詩を翻訳して載せたが、カロッサは尾崎さんにとって、「暗い魂への救い、傷つき痛んだ心への慰め」をもたらす、明るい叡智の詩人であったと言えよう。

ところで、以上のふたりの詩人、ヘッセとカロッサの場合と違って、リルケは、同じく尾崎さんがその詩から強い影響をうけたのにも拘らず、尾崎さんとはかなり異質の詩人であ

った。従って尾崎さんはこの詩人と強く対決することを迫られたが、そのことを尾崎さん自身、次のように興味深く語っている。

「彼（リルケ）は私にもまた次第に吹き募って大きくなる嵐のように来た。何かを抜き取り、魂を変えさせ、この世のそれとは違う別の世のいぶきを吹き込むように来た。それは私に私の懐かしいふるさとを、ささやかではあるが思い出や事物に満ちて清らかな私自身の精神的風土を、いつのまにか忘れさせ、遂にはそれに背かせるような強大な魔力を持っていた。その魅惑のまんなかを生きている日、彼の紫陽花あじさいいろの大きなうつろの眼と、併呑するような大きな暗い口と、麝香のような句のこもった深い幅広い息づかいと、不思議を行うしなやかな指を持つ異常に長い手と、死に瀕した巨獣のような重い体軀のうねりとが常を感じられた。この魅惑のただなかで私が私であることを維持するためには、是非とも強い抵抗が必要だった。熱い息づまる抱擁に似た組打のなかで、この巨大なあやかしの天使に押し伏せられて敗北しないためには、この有様をさえ一つの人間的ドラマとして、一つの風景として、客観視することのできる健康な精神が私になくはならなかった」（「リルケについて——訳詩の思い出」）。

ヘッセやカロッサの場合、尾崎さんは彼らの詩や散文を愛するともに、それらの作品を生みだす母胎であった彼らの人間と、その雰囲気は快く身をひたして、それから慰めや勇気を取りだすことができた。だが、リルケ

の場合、尾崎さんはその詩に惹かれていながら、その人間のかもしたす盪惑的な雰囲気には強い違和感をもって、それに抵抗せざるを得なかったが、リルケの卓れた詩技と、その結晶たる詩、殊に『形象集』『時禱集』『新詩集』などからは強い影響をうけたのであった。尾崎さんがリルケをはじめ知ったのは、昭和二年に第一書房から出版された茅野蕭々訳の『リルケ詩抄』によってであったが、この訳詩集を繙いたときの驚きを語って、尾崎さんは、

「それはまことに驚くべき啓示だった。こんなふうに使えば使えるものかと思われるような日本語が、切りたての石材か木塊のような淳朴さと新鮮さとを保ちながら、馴れない眼にはいくら奇異に、――亜麻いろの髪の毛とベルヴァンシユの碧い瞳とをした北欧の少女のように親しみ浅く――又それだけに極めて斬新なものに見える颯々とした章句や聯を形づくっていた……ありふれた抽象的な単語も、彼にあってはそれぞれ空氣の境界面を持つて一つ一つ拔群な形象をなし、写象的な単語と共に生き生きとちりばめられて、常に触感し得る立体形の形成にあずかっていた」(『リルケについて――その詩の一面』)

と言っている。

概して言えば、尾崎さんはリルケの詩語の彫塑的な造形性に魅されたのであって、その影響は『旅と滞在』以後のさまざまな詩集のうちに、かなり鮮かに見られるのである。

ヘッセ、カロッサ、リルケは尾崎さんがか

かわりを持ったドイツ詩人のうちの三本柱であるが、しかし、尾崎さんが興味をもったり愛好したりしたドイツ詩人は、もとよりこの三人に限らない。例えば尾崎さんは早くから表現主義の詩人フランツ・ヴェルフエルに共感をもっていたが、ヴェルフエルはヒットラーに逐われて、アメリカに亡命する直前に、尾崎さんにあてて手紙をくれたという。戦後、昭和三十一年に、私は尾崎さんから尋ねられて、当時ドイツの書店から新しく出版されていたヴェルフエルの『選詩集』のことを報らせたことがあるが、その後、尾崎さんはこの『選詩集』を新宿の紀伊国屋を通じて、手に入れたらしい。また、ヴェルフエルの小説『ベルナデットの歌』をイヴァン・ゴルの卓れた仏訳で読んだというのを尾崎さんの口から直接に聞いたのも、ちょうどその頃のことであった。

自然文学では、ヘッセのそのほかに、

K・H・ヴァッガールの『牧場の本』がある。尾崎さんがこの愛すべき小冊子をはじめて手にしたのは、昭和十年のことであつたらしい。作家ヴァッガールの名もそのときはじめて知ったのであるが、その「詩的な、野外の光に照らされているような文章」を読み、「著者自身の切抜き細工だという十数枚の挿画」を見て、この本が気に入る、「いつかは自分もこんな本を書いてみたいものだと思った」という。しかし、尾崎さんがこの本を親しく翻訳したのは、それから二十五年後のことで、創文社から「アルプ選書」の一冊として、出

版されたのであるが、この瀟洒な、外装も、内容も、明るく楽しい小冊子は、尾崎さんが自身でも好ましく思っていた翻訳のひとつだったのではなからうか。

なお、自然文学ではボンゼルスやシュナツクのものなども尾崎さんの読書の範囲に入っていたが、以上、ヘッセからこれらの自然詩人に至るまで、尾崎さんが傾倒し、愛読し、そして翻訳したドイツ詩人たちと、その作品の選訳は、尾崎さんの気質をよく反映していて、ほとんど予定されていたかのように、意思的にさえ見えるのは、いかにも尾崎さんらしいことである。



●「新女苑」昭和27年7月号より(撮影・安田勝彦、p. 27 も同じ)。

尾崎喜八と信州・富士見高原

富士見日記から

昭和二十五年

一月三十一日（火曜日）

今日は私の五十八回目の誕生日。この信州八ヶ岳の山麓で迎える四度目のものだ。去年の秋からの胃の不快はまだ直らないが、ほかにはこれといって故障もない。ただ仕事に根気の続かないのが困る。土地の医者言葉どおり単なる酸過多ならいいが、もしも胃癌などだったら面倒だ。何にしても今年はいろいろやりたい事があるのだから、早く胃を直してもっと元気になるなくてはならない。

朝のうち高原を降りうずめていた雨が昼すぎには止んで青空と太陽とが現れ、寒さもゆるんで時々キツツキが鳴く。妻は朝から何くれとなく気を配って、座敷を特別にきれいにしたり机の上を整理したりしてくれていたが、晩には見事な食卓をしつらえて其の正座へ私を据えた。そして「ここ幾年というもの、お誕生日が来ても何もして上げられません、今日も私の心だけをお受けください」と言ってお酌をし、上諏訪からでも買って来たのか矢島祐利の新作「寺田寅彦」と、古いネルの單

衣物をほどこいて自分で仕立てたズボン下とお祝いにくれた……

きのうはきのうで東京の娘栄子から小包が届いて、中からネクタイ一本、コーヒ一罐、青豆一袋、アネモネ一輪などのプレゼントが現れた。そして小さい紙きれが一緒に入っていて、ネクタイは夫の光三に見立ててもらったので少し派手すぎるかと思うが、自分で働いて取ったお金でお祝いをして上げる事のできるのが嬉しいと書いてあった。そのネクタイの函の裏斗紙には、彼等夫婦の名とならんで、鉛筆で書いた「ミサコ」という片仮名がよろめいていた。二つになる孫が一生懸命になって書いたに違いない。

およそこれらの愛の深さを測ることのできる測錘が、この世の何処にあるのだろうか！いや、愛とはこれを測るべきものではなく、それを受ける者が、その清らかな熱火の中で焼かれてゆくおのが真相を凝視すべきものだ。そしてその燃えゆらぐ我執や痴愚の影像から、神の似姿、人間の名にふさわしい姿を、感涙の痛みをとおして彫塑してゆくべきものなのだ。「地に落ちよ、汝おごりたかぶる慢心よ！」（バッハ第二二六番カンタータの中のバスのアリア）

二月一日（水）

高橋達郎をリーダーに、日本山岳会信濃支部員が今日から五日まで八ヶ岳の阿弥陀岳へ入る。それを富士見駅から高原療養所附近まで見送った。信州大学の地学部助手百瀬寛一、もう一人別の百瀬孝、それに伊那北高校二年生三名、辰野高校生一名計七人の一行で、午前十一時半に駅の前を出発した。私は支部長として二三の注意を与え、この積雪期登攀の無事成功を祈った。天気は快晴で北西の寒風が強く、当の八ヶ岳はもとより、富士も甲斐駒も鳳凰もすさまじい雪煙を靡かせていた。一行は今夜は立場の谷の営林小屋に泊り。そこを本拠として明日か明後日阿弥陀登頂。その間雪山でのいろいろな訓練をするとのことだった。帰途一緒に見送った療養所の朝比奈菊雄に誘われて彼の病室へ行き、しばらく休みながらソリューブルのコーヒーのもてなしにあずかった。

夜のNHK第二放送で、巖本真理独奏、藤秀雄指揮によるバッハの第二提琴協奏曲、長調を聴く。じつに美しい作品だが、特にその第二楽章アダージョの清らかに涼しく悲しい曲に心を打たれた。

寝る前にファウルズの「昆虫記」の中の「沼」という一章を実子のために朗読する。科学者の使命と幸福とを説いてエモーションに貫かれたすばらしい文章だ。それにしても「昆虫記」を読んだり論じたりする人々が、こういう処を閑却しているのが実に不思議だ。

二月二日(木)

故水野葉舟氏の三回忌。実子は床の間に父親の写真を飾り、生前の好物を供えた。千葉県印旛郡遠山村の開墾小屋の前に立っている二十数年前の写真である。

午前から午後にかけて玉川村の牛山氏来訪。三十一日の誕生日に間に合わなかったがと言つて、白米、麴、リンゴなどを持って来てくれた。先日子之神でした私の講演が大変皆に喜ばれた事などを聞いた。詩集「旅と滞在」を筆写したいというので貸す。午後二時二十四分発の下りで帰って行った。

雪の阿弥陀岳登山隊の一行を午前十一時半、午後十二時半、二時半の三回望遠鏡でインスペクトしたが、純白に光った山肌に彼等の黒点はついに一度も見えなかった。登頂は明日になるのだろうか。それとも何か故障が起ったか。

午後二時四十分ごろ太陽は内量をかぶり、左右に淡い幻日を現す。傘の半径約二十一度。栄子の手紙によると、一月三十一日東京玉川では大犬フグリが咲き、チューリップ、水仙、弁慶草がそれぞれ芽を出して、梅の蕾もふくらんでいるようだ。少し遅れているような気もするが、雪と氷のこの富士見では夢のような話だ。

米トルーマン大統領水素爆弾製造の指令を出す(一月三十一日発AP特電)

二月三日(金、節分)

朝から小雪。それが正午頃本降りになり、夕刻四時すぎて止んだ。しかし風は弱く、気温も割合に高く(零度)、春の雪降りのように美しかった。夕方甲府盆地の空から雲が切れはじめ、六時過ぎには八ヶ岳から月齢十五日の満月が上がって春の夕月のような情緒をかもし出した。

更級郡稻荷山町の小学教員でKという人、向う一年間国内留学として高村光太郎氏のそばに置いて貰いたいと思うから宜しく口添えを頼むという手紙をよこす。しかしこんな事は、たとえ本人の希望がどれほど純粹で切実だとしても、とうてい実現は不可能だと思ふ。私は高村さんという人をよく知っているつもりだし、一年は愚か一週間もあぶなく、結局不快な別れ方をしなくてはならない事は火を見るよりも明らかである。「リルケのような男にああしつくく付き纏われては、ロダンも随分迷惑しただろう」と昔私に言った高村さんだ。あの人は遠く離れて思慕すべき人。狎れ近づけば白い眼をして向うを向く。

駐米パニュシキン蘇連大使、アチソン米國務長官に日本天皇を國際戦犯裁判にかけるべき旨の正式覚え書を手交する。(ワシントン一日発特電) この報に対し総司令部外交部長シーボルトは「引揚者問題で窮地に陥っている蘇連政府がその立場をごまかす為の煙幕にすぎない」と語り、法務局長カーペンターは、「日本における戦犯裁判は極東委員会の決定に従ってすべて既に完了している」と語った。そして日本共産党志賀政治局員は蘇連

に賛成して、「当然且つ結構なことだ」と言明した。

今日は昼間の天気が悪く雲が極めて低かったため、心配はしながらも阿弥陀岳のインスペクトは不能だった。

二月四日(土、立春)

昨夜半から今晩にかけて雪が降ったらしく、土の現れていた地面にも約七ミリの新積雪。しかしさすがに晴れて立春の朝、西北西の強風に森の中は涼々と鳴りひびく松籟に満たされている。午前十一時望遠鏡で阿弥陀岳とその附近の屋根や山腹を見る。しかし頭上の空は真青に晴れてはいても山々はすべて厚い層積雲をかぶって、西岳・編笠の山頂から上はすべて見えない。この時刻の地上気温零下二分、湿度四七パーセント、露点温度零下〇・二度。高度による気温遞減率千分ノ六とすると、あの雲の底の實際の高さはほぼ此の計算と合致している。

昼近く上伊那朝日小学校の教員有賀昭典、白鳥有秋の二氏来訪。顔を見、話が聴きたくなつたから来たのだと言う。そして一人は自作の詩を示して批評を乞うた。両氏の帰りと入れ違いに上諏訪の青木正博君夫妻が、御射山神戸の金井という青年同伴で来訪。諏訪天文同好会の其の後の模様などを聴き、近いうちに御射山で青木君新製作の天文鏡で天体観測をするからは是非来てくれるようにと頼まれた。みやげに乾海苔とササゲとを貰う。同君は三月から仙台の東北大学へ帰って今後三年

間勉強する由。彼等の帰って行く時典子新夫人に「美しき視野」一冊を贈り、駅で投函してくれるように東京の美砂子への自作絵葉書を托した。

米國務省、蘇連の「天皇戦犯裁判」提案に反駁。英国国会解散。

二月五日（日曜日）

夜明けの気温氷点下八度五分、晴。

妻に声をかけられて夢の中から目をさました。夢で私はシンプロンだかグラン・サン・ベルナルだかの長い雪の峠道を、スイスから北イタリアめがけて全速力で滑降する一台の橇に身を托していた。私の前をフリードリヒ・ニーチェの橇が走り、それとほとんど並んでイタリアの愛国者ジュゼッペ・マッツィーニの乗った橇が走っている。マッツィーニは英国からの帰り道、ニーチェはジェノアかフィレンツェへの旅の途中らしかった。そして私自身はどうやらローマを行く先としてゐるらしく、三台の橇がカンテラの赤黒い炎をなびかせて、青氷の不気味に光る断崖やほの白い深雪の森の間を縫いながら飛ばしていた。厚い外套と頭巾に身を包んだニーチェとマッツィーニとは時々何か大声で話している。ちぎれちぎれのイタリア語が、急滑降する橇の動揺とその鋭いきしり音とヒューヒュー唸る空気の摩擦音とで出来たベルリオーズの「女王マップ」のスケルツォーの中を、流れる小鳥が吹き落とされた枯葉のように耳をかすめる。そして私の頭の中を「善悪の彼岸」とか

「人間の義務」とか、「曙紅」とか「若きイタリア」とかいう文字が、力づよい閃光の渦をえがいてくるくる廻る。それが無上の幸福、肉体の悦楽、魂の春だった……

そこを妻に起こされたのだ。「ねえ、あなた！　また雪が降って、今朝はうちの前の雪の上に小鳥がたくさん下りていますよ。早く起きて御覧にならない？」そう言われてしびしび起きて硝子障子のそとをのぞくと、なるほどイチイやシャクナゲの樹の下の積雪の薄い地面へ、二十羽ほどのコカワラヒワとアトリの群が下りて頻りに何かついばんでいた。それにしても今の夢は非常に短かいもので、妻が戸戸をあけながら「あら！　また雪！」と言った言葉から触発され、二三日前に見た開墾農家の子供たちの橇遊びのイメージがよみがえり、そこへ三十年も前に読んだ友人田内静三のマッツィーニとニーチェとの雪中遭遇の詩の遠い記憶が呼び生かされて、こんなにも美しい一朝の夢を構成したのであらうと思う。午後諏訪探鳥会の小平・平林両氏（いずれも小学教員）初めて来訪。来る十八日湖南村後山部落青年会のため、また二十六日茅野町で探鳥会のため、それぞれ一席の講演をしてくれと頼まれて結局引きうける。両氏は非常な鳥好きで、この土地の野鳥についてしばらく歓談した。その帰りを駅まで見送ったが急に烈しい雪降りとなり、帰途は頭から真白になった。序でに駅前の大丸屋主人に登山隊一行の消息を訊くと、高橋君たちは阿弥陀登頂の目的を果たす事ができず、昨日下午山して解

散したという話だった。昨日と今日のインスペクトは無駄だったが、無事に帰って来たことは何よりだった。

今夜から実子のためにカロッサの「ドクトル・ビュルゲルの運命」を読んでやる事にする。

二月六日（月）

終日快晴、朝の最低気温零下四度八。

風はすこし強いが春めいた暖かい日。森の中にはシジュウカラやカワラヒワの声が響き、ホオジロが恥じらうようにぐぜっている。孤独のシメは相変らずイチイの樹に。一度か二度、いつものアオゲラの澄んだ叫びも聞いた。午後駅前の郵便局へ行ったついでに高原療養所わきの天然氷製氷所の方へ廻り、三つの沢を一つ一つ横断して帰ったが、その製氷所の池のふちの枯草の中へ寝ころんで煙草を吸いながら、真青に晴れた空の下、むこうの黄色い丘の上に柔らかに頭を出している雪の蓼科山や、その上に薄すりと流れている白い巻雲の糸を眺めながら、春の甚だ遠くないことを思った。

夕日の傾くころ妻と森の裏手の池のあたりを散歩した。彼女がまだ十八ぐらいの時私が教えてやったシューマンの「最初の緑」を二人で小声で歌いながら通ると、池のふちから一羽の黄セキレイが「チッチッ」と鳴いて飛び立った。水際のネコヤナギの褐色の枝には白い絹のように光る花穂が革袋を脱いで現れ、その根株のあたりには五つ六つのフキノ

トウが円い頭を出していた。

夜、例の稲荷山町の小学教員K君に返事を書く。高村さんの処で働きながら勉強したいというその志望は美しいが、実際としてはおそらく甚だ困難であろうという事を苦心して書いた。そしてできるものならば方針を変えられるように言い添えた。しかし当って砕けるといふ事もあるから、若しもその熱望が止むがたいものならば、万一起つぱりと断られた時の落胆と恥辱に似た思いとのために緩衝機のような心組みも用意して置くようにと言った。それ以上今の私にはどうもできない。自戒——常に仕事によってか仕事を率いか、いずれにもせよ絶えずおのが運命を彫り刻みつつ前進すること。

二月七日(火)

晴、朝の最低気温氷点下三度。

昨日東京のみず書房から郵送されたロマン・ロランの革命戯曲「理性の勝利」を読んだが、この新城和一氏の訳にはところどころ間違いがあるようだ。たとえば第一幕の初めの方フォセットとユゴーとの対話の中で、フォセットの言う「オーストリー軍がコンデに加わったって」は、「コンデに侵入したんですって」が正しいのである。訳者は地名のコンデを亡命貴族のコンデ公だと思っている。そして巻末の註にもわざわざそう書いている。同じ幕の第二景最初のト書きに「ゴセックの音楽」という一句があるが、訳者は巻末の註でこの作曲家を「マルセイエーズ」の作者だ

と言っている。ところで「マルセイエーズ」の作曲者がルジェ・ド・リールである事は周知の事実である。ロランも「ゲテとベートーヴェン」の中でこの事に言及している。ロマン・ロランの全著作の翻訳権を持っていると称する「友の会」なるものは、此のような危なげな翻訳が彼等の内部から出ることに充分な警戒をしなくてはならないだろう。

実子は東京へ可愛い孫の美砂子を見に行きたいらしく、私としてもやってやりたいのは山々だが、今の経済事情から考えてももう少し待ってもらいたいと思う。彼女ももちろん諦めてはいるが。

夜は空気が澄んですべての星が照り渡っていた。午後八時すぎ、五分間ほどの間に双子座から三個の流星、駁者座から一個のすばらしい火球が流れた。八時半ごろ駁者座のM三八と三七、牡牛座のM一、大犬座のM四一など幾つかの星雲を望遠鏡で見た。あの蟹座のM四四プレセペも四年ぶりに。

今日の読書から。——「余は企画するため希望を必要とせず、忍耐にあたって成果を期せざるなり」オランジュ公ギヨーム。

二月八日(水)

曇後雨。今朝は気が乗ったのでNHKからの依頼原稿が一気に書けた。「二月の春」。昨日製氷所池畔の枯草にすわって眺めた風景の感銘と、日没時の実子との散歩で歌ったシューマンの早春の歌の余韻とで出来たようなものである。夜清書をして明日速達で送るこ

とにする。

実子は正午の汽車で上諏訪へ用達しに行った。四時半頃から雨が降り出したのでぬかるみの道を傘を持って駅まで迎いに行ったが帰って来ず、一旦山荘へ戻って次の汽車のとき今度は長靴を持って迎いに出かけた。三輪氏の家の時計が遅れていたのので四時十五分のに乗り損ねたのだそう。もう日が暮れて、雨にゆるんだ十数町の霜どけ道は真暗な田圃のようだ。その坂道を懐中電灯の細い光穂で照らし照らし、夫婦で声をかけ合って互いにいたわりながら帰って来た。

東京の小松平五郎君から福島県磐城農業高等学校の校歌の楽譜がとどく。さっそくオルガンで弾いて歌ってみる。いい作曲が出来て作詞者の私としても満足だ。ハ長調四分ノ四。切分音がよく生きていて、悲壯の気を漂わせながら男らしい。いつもながら小松君は私の詩の精神をしつかりと掴んでいる。

二月九日(木)

この三四日ひどく暖かで、このぶんどと直きに春が来てしまいいそうな気がする。今日も終日零上の気温で、午後一時には九度二分を測った。しかし一日中小雨が降り、地霧が盛んに発生して室内でも息苦しいほどだった。

実子が「今日の霧はおもしろいですよ。地面から二メートルぐらいの処まで出来るんですが、それから上は無いんです」と言うので午後二時に実地について観測してみた。小雨が降り、それと分かる位に弱い南の風が吹き、

湿度は八五パーセント、前庭の地上三センチの処で気温二・五度、地上一メートル半の処で九・三度。従つてもしも温度一〇度の空氣が八五パーセントの湿度を保つて温度二・五度の地表まで下りて来るとすると、その途中の大体七・五度あたりの処で飽和に達し、それ以下の処では水蒸氣の凝結がおこるのは當然の事のように思われる。しかし当然な事だと言つてそれで済ましてしまつてはいけないのだ。この氣象數理的にも典型的な地表霧、約一メートルの厚さで森の中や草地や畠を被うている灰色の霧粒の柔かな平らな敷物。この自然の仕事と美觀とに驚異や歎賞をいだく心が無かつたら、よしんば多少の氣象學的知識や物理學的素養を持つていたところで真に富める人とは言えない。

東京の榮子からの便りで、小さい美砂子が実にすなおで、同情心があり、物わりの良い子だといつて人々から可愛がられ感心されていると言つて来た。そしてそれぞれ實際の例が、目に見えるように事ここまかに書いてあった。どうか幼い彼女がいつまでもそうであるように！

二月十日（金）

最低気温零上一度、最高一二度。

夜明け前にすさまじい雷鳴で目を覚ました。たたきつけるような雨が降り、森じゅうが嵐の響きに満たされていた。午前五時十五分の氣圧九九〇ミリバール。雷鳴は約一時間つづき、三十回ほどを数え（二分間に一回の割合）、

やがて次第に南々東甲府盆地の方へ去つて行った。温暖前線上に發生した界雷の通過である。午前七時には氣圧が上り、気温も十度あまり急昇し、八メートルから一〇メートルぐらいの西寄りの風、驟雨性の小雨が残つていた。

午前九時から十時、雨後のすがすがしい空氣と春のような日光とに誘われて、妻と二人で裏手の見晴らしの丘へ上がった。すると向うのハイランドの後ろにあたつて目も覚めるような鮮かな虹が、紅から黄色までの七彩を燦爛と輝かせて数回現出した。二人とも感歎して眺めていたが、こんなにも完全な、こんなにも鮮明華麗な虹は今まで見て見たことが無い。

南安曇郡の温明中学校長小沢忠夫氏から講演を依頼して来たが、三月中は仕事に没頭しなくてはならず、それに丸二日掛りでは時間も取られ疲労もするので、又の機会を待つことにして断りの手紙を書いた。

三月四日までに講演の約束六つ。最後のものは松本市でのベートーヴェン生誕百八十周年に寄せる記念講演約二時間。その後で豊田耕児少年の弾くベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタがある事になっている。

（「歷程」昭和三十四年三月号）

「富士見日記から」の前後に

妻実子、娘榮子に送られた葉書

石黒榮子宛

昭和二十五年一月十三日

一月九日のハガキで「今度は私が危いところ」とあつたが、其後はどうですか。いつでも誰かしら何処か悪いのは困りますね。それにしても御手紙の度にミチャコの滑稽な事や可愛い事を書いてよこして呉れるのを何より嬉しく楽しみにしてゐます。先づ手紙が来ると誰かが声に出して読んで聞かせて、それから改めて銘々に読み直し、それぞれ涙をこぼして笑ひこけるといふ有様です。ミチャコに関する御たよりはそつくりそのまゝミチャコの生活史になりますから大事に取つて置くことにしてあります。続けてどんどん書いて御よこしなさい。但し鉛筆でなくペンでね。鉛筆だと永い間には消えてしまふ惧れがあります。

ジェジェ十四日には伊那町の弥生ヶ岡高等学校へ行きます。一時間位の美しい「ベートーヴェン講演」をして、それからヴァイオリン・コンツェルトを聴かせるのです。雪の木曾駒連峯と赤石山脈を東西にした伊那の谷の或る高台の学校で、若いけなげな男女の学生数百人を前に、中には多勢の先生達もあるでせう。自分まで感動しながらベートーヴェンを語るジェジェを想像して下さい。そしてその人が可愛いミチャコのジェジェだといふ事を。

カッチンは今月中にそちらに行けるやうになるでせう。尤も私の誕生日が三十一日だから事によつたら二月も早々といふ事になるかも知れないが、さうしたら勘弁して下さい。

私もだんだん仕事を頼まれるやうになり、その仕事やら自分のための勉強やらで忙しく

なりますが、自分に満足するほど働き、そして他人を喜ばせるといふ事は体力をも必要とする事です、今年は自分で自分を鞭達して、此の使命を全うする覚悟です。

あなた自身の体を大事に、光ちゃんにも気をつけ、可愛いミチャコもよく育て、バツパーやジェジェとの再会の日にはいつでも元気で若く美しいママであるやうに努めて下さい。父の言葉です。

石黒栄子宛 二月十八日

あなた達の御庭での春のめざめの御便りありがたう。起きる朝ごとに、又今日も新しい命が一つよみがへつたと喜ぶ心はそもそも何と幸なものでせう。モーツァルトやシューベルト、知つてゐる「春の歌」を口ずさみながら。

古い積雪が消えるかと思ふと又新しい雪の降りつもる此の富士見の高原にも、しかし空の色、日の光、雲の影にはすでに春の思が流れてゐます。猫柳に、ハンノキや白樺の花穂に、晴れた日の微風が光つて、小鳥達の声もみづみづしく響くやうになりました。此のパンジーは私達の夢です。

(葉書の右上にパンジーの絵あり)

石黒栄子宛 二月廿一日

光ちゃんからの便りで、美砂子と二人風を引いて寝てゐるといふ事です、其後、どんなですか。暖かくおとなしく寝てゐて、こじらさないやうに願ひます。

美砂子の喜んでくれるのが楽しくて、此のところジェジェはよく画ハガキを書きます。昨夜もアラセイトウを描いて此れと一緒に出すことにしました。

うちではピヨ子が十八日から産みはじめ、昨日まで三日立てつづけに小さい可愛いのをプツと出してゐます。いくら卵肉兼用の鶏でも、とてもつぶすなんて気にはなれませぬね。ジェジェは伊那、茅野、松本と、三つの大講演を控へてゐます。松本は豊田天才ヴィオリニストの演奏をつけた記念講演「ベートーヴェン」です。

きさらぎや苔をはぐむ雨細し
残雪のからからとある疎林かな

(宛名の下に) このところ毎朝の最低気温零下七度から十一度、早起きのバツパーは大変です。二月十八日の朝日新聞の社説を読みましたか。「暖冬のバラ」といふのですが、私はすっかり同感して、近來にない良い気持ちになりました。バツパーも感心してゐました。(バツパー至極元氣) 皆さんによろしく。くれぐれも御大事に。

「お前はほんとに可愛いよ。パタパタパタ……」

石黒栄子宛 二月廿二日

昨日電報をうけとりました。やつぱりお前が光ちゃんかが病氣をしてゐるのだと思つて、こちらもお母さんがゐないと不自由だが、廿三日に行つて貰ふ事にして直ぐ其旨の返電を打ちました。

私は廿五日(上伊那)と廿六日(茅野)に講演を控へてゐ、この所毎朝零下十度、十一度といふ酷寒で中々自炊も大変だが止むを得ません。一日も早い全快を祈ります。

たゞ三月四日に松本の講演があり、五日夕刻でなくては帰つて来られないので二日カラッポになるのが心配ですから、出来るならば三月三日までには帰宅出来るやうであればいいがと願つてゐます。御大事に。

石黒栄子宛 二月二十三日夕

御手紙と為替とを今うけとりました。二十三日午後三時五十分、バツパーは今頃立川の南武線ブラットフォームで、早く来ないかと電車を待つてゐる事でせう。そしてもう一時間半もすれば、あなたの家の玄関へ立つて、「ミチャコ! バツパー来たわよ! キイキはどう?」つて、あのチャーミングな声で、透明な鼻をして、きつと訊く事でせう。あなた達の久しぶりの再会が目に見えるやうです。美砂子が瘦せて眼が大きくつたといふ便りは、ひどくジェジェを感動させました。どうかよく看病してやつて下さい。重態ではないのだからと油断してゐるうちに、本当に重態にでもなつたらそれこそ大変ですから。あなたもさうだ。あなただつて強氣になつて無理をして、もしも大事にでもなつたらどうしやうと云ふのだらう。それやこれやを思ふと一人で遠くゐる身には不安が不安を生むばかりです。光ちゃんも大切にしないではいけません。こちらの事は気にしないで、そちらの

養生專一に願ひます。

バッパーに風を引かないやうによく云つて下さい。

尾崎実子宛 二月二十四日朝

予定どほり安着の事と思ひます。皆がさぞ喜んだでせう。ミチャコはお前を覚えてゐたかしら。噂にのみ聞いて、歌に歌つてゐた「バッパー」を。

今朝は目醒時計できつちり七時起き、さてそれからが大事輪でした。昨夜から仕掛けておいたストーヴへ先づ放火し、掃除をしながらカンテキへ火を起し、座敷と台所との間を数十回往復し、幾度も無駄な事をし、さうして漸く九時に食事を終つて例の各地の気温を書取るといふ始末でした。ピヨ子達の飼^{（マニ）}つけは其間の八時にすませました。難関は明日の朝で、今から考えてもゾツとします。五時半に起きて七時には出発だから、よほど巧に頭をはたかせないと朝飯も食ひそこなふ。だから今日のうちに飯を新らしく置いて置いて、あさに起ぬけに蒸して、卵をかけて掻つ込んで行かうと思ひます。例のコーヒー見たいなヤツを一杯引掛けて行ければ見つけものです。何しろそちらが一番心配、毎日様子を知らせて下さい。ミサ子への画ハガキは、あれでもジェジェの姿です。初めて人間を画いて見ました。

もたびたび目がさめました。どうか出来るだけ手をつくして、一日も早く元のやうな元気な子供にしてやつて下さい。

明日はいよいよ早朝からの上伊那行、自分の朝飯とピヨ子達の朝餌の事が気がかりです。廿六日の方は時間が少し有るので大した苦勞でもないけれど。

「暖冬のバラ」を読んだ由満足です。そして「今程スズメノカタビラの縁がきれいに見える時はない」といふあなたの眼と心ともジェジェは喜びます。斑々と残つてゐる山野の雪の中、ハンノキの紫褐色の花房が南西の微風に揺れ、老巧なのと稚拙なのと二羽のホホジロの歌が林のそとで響いてゐます。

冬もはや砂かき濁し松藻虫 行人

（昭和二十五年は喜八五十八歳、実子四十五歳、娘栄子二十五歳、孫美砂子一年九ヵ月。栄子一家は東京世田谷区玉川で結核療養中の主人光三を中心に花の栽培と養鶏を生業としていた。文中ジェジェは喜八、バッパー・カッチンは実子の事で孫美砂子の幼児語。ピヨ子達の「ピヨ子」は、富士見分水荘で飼つていた鶏プリマスロックのことで、「達」は名古屋コーチン種のこと。この時期喜八は珍しく孫美砂子にそれぞれの生活に関連のある絵を描いて文章をつけた絵葉書を数枚送っている。その一部は「アルプ」尾崎喜八特集号に掲載）

信州の高原三景

娘たち

長野県富士見高原。八ヶ岳の連峰が西へひろげた広大な裾野^{すそ野}。その片隅の白樺と赤松の林のなかに、指折りかぞえて早くも六年の歳月を住んでゐる私達夫婦にとって、東京からの移住以来親しくなつた男女無数の人達の中に多くの若い娘等のある事も、また楽しい必然だという気がする。

六年といえは、其の間に学校その他で私の話を聴いた娘もあるだろう。山や島で働いてゐる時に、ふと散歩の私と言葉をかわしたり写真にうつされたりしたのが縁で、それ以来私達の家をたずねるようになった娘もあるだろう。小学校の暑中休暇の宿題に、林のふちや路傍でのその蝶や蜻蛉の採集を、私という「知らない小父さん」に手伝つてもらつた女の子もあるだろう。また厳寒の冬の朝早く、幼い手で拾ひ集めた枯枝を山のように背負つて、よろよろとよるめきながら森を出てゆくうしろから私の妻に呼びとめられ、こごえた両手を握つて暖めてもらつたり、菓子を含んで与えられたりして、真白な霜の細道をいそいそと帰つて行つたいたいけな六つか七つだった子供もあるだろう。その他さまざまめぐりあわせて知り合つた此の高原の女の子たち、そういう子供たちがみんなだんだん大き

石黒栄子宛 二月廿四日

美砂子はどうかだらうか。それが心配で昨夜

くなつて、今はういいういしい娘だったり嫁入り近い立派な若い女性だったりしているのである。私達が年を取るのも、これまた当然の成行だと、言わなくてはならない。

しかし年は取ってもまだ心の若さは失われない私だ。一望の高原に落葉松の若葉のやわらかに萌える時、おちこちの村や山麓に山桜の花が薄赤い雲をなびかせる時、南への旅から帰つて来た小鳥たちが故郷の森にその第一声をひびかせる時、そして人間の身に心に古い春の衝動の脈々とよみがえる時、昔ながらの散歩者である詩人私は、あの娘らと山国の四月・五月の路のほとりで出会うことを喜ぶ。

我家から半里の南、或日私は高原末端の国道に沿つた深い谷川のふちにすわつていた。谷の兩岸は銀緑色の羅紗の小ぎれや瑪瑙の粒をつつたような樹々の新芽。その岸の岩を噛んでエメラルド色の雪解けの水は音を立てて流れているが、高い瀬音に消されもせず、濡れた岩にとまつて美しい囀りを聞かせているカワガラスという濃い褐色の小さい鳥を、私は一心に双眼鏡で眺めていた。すると突然、頭の上の国道から、「あれっ、先生！」と私に叫ぶ若い女の声がするのだ。振りかへつて見上げると、俊子という娘が道ばたの胡桃の樹につかまつて、可愛い笑顔でいぶかしそうに私のほうを見おろしていた。

「先生、そんな処で何してる？」

「ああ俊子さんか。鳥を見ているんだよ。おりておいで、見せてあげるから」

思いがけない時と処で私に逢つたことをひ

どく嬉しく思つたらしい娘は、若い身空にあられもなく、うしろ向きの四つん這いになつて、春を輝くタンポポやシドミの花を踏みしだきながら急な斜面をおりて来た。そして私とびつたり並んですわると、私に教えられ、自分でもさんざ苦心して、やつとの事で溪流の岩の上の小鳥の姿をレンズの中につかまえたが、その美しさ、そのきびきびした動作に感歎の叫びを上げた。今日彼女は勤め先の組合が日曜日の休みなので、町まで買物に行つた今その帰り道だと言う。父親は大東亜戦争の末期に沖繩で戦死をとげた。後に残された母親は今年十八になる此の長女を心の頼みに、三人の年下の子達を育てている。その純真さと孝心とをいつも私達夫婦が寝て讀んでいる可憐な娘だ。それが今私と一緒に信州の春の谷間で、つめたい水の流をくぐつたり、岸辺の岩で歌つたりしている鳥を見ている。私は肩に吊つた編袋から、赤や緑に染めた如卵を二つ取り出して、赤いほうを娘に与えた。

「この卵、どういう？ 先生」

「これはね、復活祭の卵と言うんだよ。今日はイエス・キリストの復活祭。此の日には色で染めた卵をみんなで食べる古い習慣が外国には有るんだ。私の家でも毎年そうするから、こうやって持つて来て、君にも分けて上げるというわけさ」

こうして私達は自然のすべてのよみがえる春の谷間で、肩を並べて祭の日の卵を食べたが、やがて別れて娘は国道を半里下手の彼女

の村へ、私は尚も別の小鳥を求めて国道を反対に登つて行つた。

また或時の遭遇は光枝という娘だった。山麓の農家の次女で歳は二十。若い村の木のようになすりとして健康で、生気に満ちた美貌に黒耀石のような眸が晴れやかにも涼しい。伶俐で働き者で、男まさりの信濃乙女の、まことに其の選良と言つても恥ずかしくない程である。

その日私は高原の奥の或る開拓部落に、一人の養蜂家をたずねての帰り途だった。信州の五月の春はたけなわで、高山の残雪のひかりも柔かく、青くうるんだ空の海には行く先で雲雀がさえずり新緑の林の中には鳴りひびく小鳥の声と白いチゴユリや舞鶴草の花。野には赤や樺色の蓮華躑躅が今をさかりとむらがり咲いて、そのあいだにはアヤメや野花菖蒲が、青や紫の旗のような花をゆらゆらと風に揺られている。私は長い冬じゅうを待ちこがれていた此の春の世界を酔つたような氣持で歩きながら、それでも或る窪地の草原で草を食っている一頭の裸馬を見たことを覚えていた。

私が我家の近くまで来た時ひょっこり光枝に出遭つたのは実にその馬のためだった。彼女は田圃から逃げ出した馬を探し求めて茫々たる高原の春の野道を来たのだった。私はたつた今それらしい裸馬を見た話を話し、その居た場所を教えながら、尚氣に懸かるので彼女を案内かたがた一緒にいて行つた。運よく馬は窪地で相変らず草を食つていた。光

枝は何気ない顔をして近づいて行くと、手早くその口輪を引摺んだ。そして平首を優しく抱くようにしながら、ちぎれた手綱にあまりの手綱を器用に結んだ。それから私に幾度も札を言いながら、此の馬はよく働いて性質もおとなしいのだが、どういふものか此頃は気が落ちつかなくなつて、時どき逃げ出して困るというような事を聞かせてくれた。

暫らく一緒に歩いた私たちは、やがてめいめいの家へのわかれ道へ来た。すると娘は、「では先生さようなら。どうもありがとうございます。近いうちに遊びにおいでなしてね」と言いながら、鞍も鐙もない裸馬の背にひらりと身を跳ね上げて跨がると、真赤な紐をあぐに結んだ新しい鍔広の麦藁帽子の下から、あの濡れるように光ったきれいな眼を見せ、紺の手甲で包んだ白い片手を上げて振り返り振り返り若草の中に炎々と躑躅の燃える高原を、まるでワルキューレの娘らの一人のように飛ばして行った。

伊吹麝香草

今日は朝の散歩の途中、丘の斜面の草のなかに、ひとところ蔓を引いて咲きこぼれている此の夏最初の伊吹麝香草の花を見出して喜ばされた。太陽の光線の力づよい、大きな雲のきらきら輝く梅雨の晴れまに、高原の夏を象徴する匂も高いその花がいかに新鮮に、いかに清楚に、いかに待ち望まれたものとして私の心を強くとらえた。

花にせよ、草木のもみじにせよ、春秋に渡

来する小鳥にせよ、また蝶や蜻蛉や螢のような昆虫にせよ、その毎年の最初の発見にはかならず或る鮮かな感銘のともなうものである。自然を愛して、永年のあいだ自然をこまかく注意ぶかく見ている者にとっては、自分の住んでいる土地の生物や色々な天気現象について、一種の暦が——いわば自然暦ともいうべきものが出来上がっている。そして人は、めぐって来る季節を前に、記憶の中の暦を繰りながら、やがて現れるものを待ち望み、ついに出現したそれを切実な喜びをもって迎えるのである。

この楽しい予感と期待と輝かしい実現とは、われわれの自然暦の大きな魅力であるが、一年の時の流のそれぞれの日に必ずその約束が果たされるといふ点で、此の暦は又われわれに深く自然を信頼させるといふ大きな徳を持っている。しかも大多数の人々は、この信頼の意味に心をひそめてみようとはしないのである。

私は斜面の草の中を下りて行って伊吹麝香草にちかづいた。すると早くも足の下から此の植物特有の爽快な匂が——夏の晴れやかさを強調し、汗や倦怠を駆逐する鋭い佳香が、透明な霧のように立ちまよった。私は小さく丸くかたまつて咲いているそのライラック色の花の房を五六本、米粒のようなこまかい葉の対生している細い茎ごと、蔓の先からちぎって採った。匂は私の指の先からも夏のメモディーを高く歌った。

今その伊吹麝香草の花は、それにふさわし

い小さい涼しい壺に挿されて私の山荘の机の上にある。梅雨の晴れまの明るい午前を森の中では日雀がさえずり、森の外では遠い郭公の声が霞んでいる。私はこれから又毎日の仕事であるリルケの詩の翻訳にむかうつもりだ。岩をうがって清冽な泉をほとばしらせるような「時禱詩集」の翻訳に。

腕からはずした時計の銀のわくの中では、ほそい針が午前十時をさしている。

晩 秋

十一月が北西の季節風ときびしい霜とをわけてやって来た。この信州の高原にもう蝶の姿はなく、花の輝きもなく、あれほど森や草原を満たしていた虫の歌も亡びてしまった。赤や黄に草もみじした野は霧に濡れ寒気にこごえて、日ごと沈痛な紫や褐色に変わってゆく。霜にちぢれた木々の紅葉が、晴れた日のつめたく碧い空の下で崩れるように散る。蕎麦も刈られ豆も刈られて、今はすっかり空虚になった丘の開墾地の高みに立つと、富士はもとより、八ヶ岳にも蓼科にも、甲斐駒にも鳳凰にも、これが根雪となる新らしい雪がプラチナのように光っている。霧ヶ峰の平坦な山頂のつきるところ、薄赤くたちこめた晩秋の霞の奥に帆のように浮かんでいる北アルプスの連峰。その槍も穂高も常念も今はもう真白だ。ガブリエル・フォーレの哀傷の秋、ローベルト・フランツの痛恨の秋。その秋も更けて冬のはじめ高原のサナトリウムに病を養う患者たちも、日は一日と南に傾く太陽に、白い

ベッドの中で越年のほぞを固めているであろう。私に親しい村の若者や娘たちが、あちこちの山裾や谷間の林で、落葉掻く熊手の音を響かせているであろう。

哀傷の秋、痛恨の秋。しかしまた私にとつては、花やかに輝かしい春よりも夏よりも、一層近く人々の心を抱きしめ、彼等それぞれの運命に自分の運命をまじりこませたいと夢想する秋の終り、冬の初めだ。

今朝も私はそういう思に暖められながら、絶えず緋色や硫黄色の枯葉の降る森を出て、この別荘の持主の小さい牧場のほうへ歩いて行った。そこにはちよつとした池もあり、牧柵をこえて枯草の果てに八ヶ岳も見え、すわりこんでばんやりと風景を眺めたり、膝の上に本をひいたりするのに格好な乾草の堆積や、日当りの窪地がいくつもある。私はその牧場へはいりこんで、牧舎の羽目を背に、高原の遠近の風景にむかったのである。

しかし今朝の私はいつものように今日の仕事を心に描いたり、また煙草を吸いながらばんやりと眼をさまよわせたりしてはいなかった。もう幾日かで七年住み馴れた此の富士見の高原をあとに、故郷の東京へひとまず帰ろうとする身には、豊かな枯草に足を投げ出し、おだやかな午前の日光を浴びてはいても、目に触れるもの一つ一つに、深い愛惜の情をかわさずにはいられなかったから。

眼の前の池には晩秋初冬の方解石いろの雲が動くともなく映っている。私をして過去七年、いくつかの詩を書かせ文章を物させた池

であり雲である。

ときどき山野を枯らしつくす風が吹き高山の雪の波形がちらちらと光る。彼等も私をいくたびか迎え、いくたびか私から美しい歌をなさしめた。

白茶けた牧柵にとまっている最後の赤蜻蛉はもう動こうともせず、池には仲間の死骸が枯葉と一緒に数知れず浮いているが、つめた

い青磁いろの空を銀いろの鵜の群はしきりに飛んでいる。もしも私が此の冬も尚ここにとどまっているのだったら、ゆっくりと心をこめて書いてやりたい昆虫や鳥たちである。

もうすっかり驚いろに枯れた釜無の山の中腹からは、去って行く私の心を泣かせるものとして、晩秋の炭焼の薄青い煙が幾すじか立ちのぼっている。なぜならば今あの高い処で炭を焼いている人々さえ、すべて私の幾年の友だったからだ。

私は持つて来たゲオルグ・トラークルの薄い詩集をついに開こうとしなかった。本は私の膝の上、青い作業衣の上で初冬の日光にそりかえっていた。

「旅」昭和三十一年九月号

(イ)娘たち ●俊子のこと『詩文集 夕映えに立ちて』の「復活祭」にエピソードとして収録。初出「学鑑」昭29・4

●光枝のこと『詩文集 夕映えに立ちて』の「詩人」にエピソードとして収録。初出「新潮」昭26・7

(ロ)伊吹麝香草 『詩文集』になし？

(ハ)晩秋 『詩文集』になし。初出「初冬

山を想う

の別れ」の題で「信濃毎日新聞」昭27・11・25 同題で「日光と枯草」に収録

此の春には、高原の村のあんずの花が五月の風に淡紅い旗のように拡がっている下で、向うの古い牧柵のかなたに遠くかすみをまとい、宙に浮いている銀と青との北アルプスの山々をながめながら、「老の山歌」という文章を書いた。それは今でもなお山を愛しながら、老いと体力の衰えとのためにもう高い山へは行けない一人の登山家の心境を、かつての山頂からころがり落ちて今では平野の草になかば埋もれている岩石のような、あきらめを帯びた叙情的なしらべにたくした一編だった。そして「もうそんなにだめになったのか」と、とがめるように聞く友人に対して、「残念ながらどうもそんな気がする」と答えるのだった。

元来詩人という者は自分の選んだある主題に心を魅せられると、その詩の世界の奥から奥へとさながらの現実を生きるように生き深めて行くのが常であるが、私の「老の山歌」の場合もそれと同じで、書きながらその世界を生き、生きながら書いているうちに自分の現在よりもっと老境にあるような気がして来るのだった。

ところで、つい一週間前には友人二人に誘われて八ヶ岳の阿弥陀へ登った。一年を通じて

て朝な夕な自分の家から四里たらずの空にその豪壯な山容を仰ぎながら、比較高度一九〇〇メートルのあの急峻を実際によじるが持つことには、いささか自信がなかった。

しかし夏の朝露にびっしょりぬれた二里の組原をななめに横ぎり、前山の御柱山を立場の谷から一気に押上って、いよいよ目ざす阿弥陀の狭い急傾斜の西山稜を息をきらせながらよちよちくし、やがて肩の岩場を乗り越えて二八〇七メートルの山頂へ立った時には、この様子ならまだ幾年かは山を楽しむことの出来そうな自分の体を喜んだのだった。

透明な水蒸気を多量にふくんだ暑いきらびやかな一日で眼の前に半円形の岩のようにそそり立つ赤岳も権現も横岳も硫黄も、さながら明鏡の中に映る物のように、天然のノミで刻まれた彼等の岩とはい松との赤黒い巨体のあらゆる細部をくつきりと見せていた。その赤岳と権現との間では野辺山ノ原、秩父の山が熱気にけむり、伊那や安曇の空にはブドウ酒のアワのような淡紅い雲の頭が並んでいて、これをぬきんで、木曾駒、御岳、乗鞍、槍、穂高の中部高しゅうん山岳が、彼等のおびただしい残雪を星のように、結晶のように浅黄色の大気の奥にきらめかせていた。

自信を得た私はこれからもな幾多の山に登るだろう。頂上の熱い岩に背をあたくめながら一万尺の風に吹かれ、はい松の中に身を倒して底知れぬ天空を見入ったり、金鈴を振るような岩雲雀の歌に聴き入ったりするだろう。そうかと思えばまた、きのこやこけの香

のする秋の端山へ分け入って、身も心も真赤な紅葉と金色の日光とに染まるだろう。私は登山にも変化が欲しい。しかも祖国日本の山には千姿万態の妙味がある。私はそれを満喫しよう。この国土に生をうけた人間の喜びとして、また義務としてさえ。

（「信濃毎日新聞」昭和二十四年八月七日）

句誌「白樺」の選及び講話

—富士見高原療養所の同人誌より—

高原集

尾崎行人選

天 龍胆の紫濃ゆく陽をかへし 工藤芳子

僅かに霜をうけたりんだうの濃い紫と金色の花粉、それに照る秋の陽。植物学的真理にも適った佳句といへよう。

地 朝寒や天窓映ゆる白湯を呑む 川上久子

朝寒と天窓と白湯とのひびき合ひ。白湯であつて可。天の句と甲乙なし。

人 午後の陽を欲しいまゝにして秋野鍛冶

高橋良平

晩秋にして陽を欲しいまゝの感適切。ささやかなこのまじい日本の風景。

尾崎先生御講話

「写生」と言ふ事に関して何か話をしろと言ふことでありますから写生と言ふことを中心にして俳句に関することを色々御話することとします。

正木先生の御選評にも時々ありますが訳の

判らない一体何を言つてゐるのか一向判らない句があります。叙述法の不器用とでも言ひませうか、文語体と口語体との不思議な交差点にある様な俳句の語法がよく出来てゐない句があるのですが、俳句の所謂写生とは言葉の叙法を用ひて絵を画くことであり、言葉を通じて自然を画き、その人の心を句はせることであります。然し其の為には省略と言ふことが大切であります。

十七字の文字の枠の中で絵を画くのでありますから省略と言ふことを忘れると何が何だか判らないと言ふことになるのです。

我々初心の者が絵を画く時、勝手に画かせて置いたならキツト家の屋根のトタンを一枚一枚向ふの木葉を一つ一つ画くでせう。若し其処に白い鳥の翼があるならそれも白くチヤンと画くでせう。空の雲を画く時も今頃の高積雲を一つ一つ其の様に皆画かうとするでせう。処が絵の上手な人は必要ないと見れば電柱の一本位はドン／＼省略してしまふでせう。でも絵の判つてゐる人はチャンと画くべき事を知つてゐますから省略はしても大切な肝心要の所、自分で画かうとしたもの、自分の心に絵心を起させたものはシツカリとよく掴んで逃しません。自分の芸術家としての力を通して自然を表現しきつてゐます。

俳句に於ける写生も又然うであると思ひます。其の点は全くよく似てゐるのです。見た通り画くと言ふ事は大層立派ではあります。然しそれでは植物図鑑の図の様なものに過ぎません。植物図鑑の図はその植物に針の様な

棘があればそれをその様に丁寧に画いてゐます。然しあれは絵ではありません。唯単なる図鑑の図であります。絵となると必ずしも藪が何うあらうと、萼が何うあらうと構はない。科学的真実と言ふ事には一切構はない。唯見て感じた通りに画く、それでゐてその絵はそれが本当に龍胆の様に生々と感じられます。

科学的真実と芸術的真実とは必ずしも一致しないのです。それには差があります。ミケランジェロがモーゼの像に角を二本附けた。幾らモーゼでも人間であるから角などある筈がありませんが彼は今から二、三百年経てばモーゼが此に似て来ると言つて受附けなかつた。又或法王の像を作つた時、法王が鼻が尖り過ぎてゐると言つて文句を言つたら大理石の粉で鼻を擦つて低くする風をしたらそれで法王は満足されたさうである。

芸術家が芸術的に本当に真実を掴まうとすれば赤を黄に画くかも知れません。画家は真に感じた通りに画いてゐるのであります。ロダンの画いたクレマンソーは海豹に似てゐると言つてクレマンソーが怒つたさうですが彼が後世に遺した偉業は海豹の様な顔をした人にして初めて成遂げ得る様な仕事でありました。梅原龍三郎の富士は子供の画く富士の様であつて決してコニーデ型火山の美しい形はしてゐません。真赤な太い荒い線でグイ／＼と画かれてゐますが、耀く許りに画かれた富士であります。それは富士の莊嚴さ、雄大さを実によく画き出してゐます。然し彼はデッサンから始つて今迄に何十枚の富士を画いて

ゐるでせうが猶物足りない、富士のあのボリユームには及びもつかないと言つて努力してゐます。芸術的真実と外観とは大いに違ふのであります。

処でさう感じたからと言つて緑系統の色で全体の絵を画くそれをその儘俳句に許容するかと言ふと俳句では許容しません。何が許容しないかと言ふと俳句には風雅の世界があつてこの風雅の世界がそれを許容しないのです。どんな切羽つまつたこと、絶体絶命の境地でも風雅が抜けては俳句でない。哀れさ、自由、含蓄その様なものが複合的に集つた一種の感じ、これが是非要るのです。唯ベタ／＼と絵具を塗つた丈では句にはなりません。

此所に十七文字の芸術が成り立つてゐるには省略が必要であります。含蓄が要るのです。十七文字の中から大きく展開し發展して行くのは含蓄が必要なのです。そこで俳句には季節感と言ふものがあつてその御蔭で初めて含蓄が生れ、省略が成り立つのです。季節があつて此所に土台になる雰囲気が出来上るのです。

『龍胆の紫濃ゆく陽をかへす』の句を読むと私は直ぐに秋を感じる事が出来ます。龍胆に對してゐる秋の光線、それは波長の長い赤系統の光でありまして夏や春でもないし、冬の光線でもありません。矢張り秋らしい感じを有つた光線であります。私達が此の句を読んで直ぐに此の事を感ずることの出来るのが連想の世界であります。若し俳句から季節感をなくしてしまつたならば、それは川柳になつてしまつて俳句の感じはなくなつてしま

ふでせう。

然しこの連想と言ふことは読む人の立場で考へれば読者の作者への協力であります。読む人は作者と同等の連想可能の人でなければなりません。読者は作者と同じレベルにゐることが必要であります。その為には俳句を読むのにも大いに、大いに経験することです。そこで連想が可能となつて来ます。龍胆の花を見た事のない人、日本の白湯の味ひを知らない人には龍胆の句や『朝寒や天窓映ゆる白湯を吞む』の味ひが判りません。彼の白湯の味ひ、その容器は金属や硝子のコップではないけません。瀬戸物、さうです、焼物でなければなりません。日本人なら焼物に入れて白湯を吞む味ひを知つてゐるから其の上に立つて作者も句を作つてゐるのです。物を見る、経験をすると言ふことは句を作る為には必要なことです。大いに見、大いに味ふ、そこで句を作るのです。句を読むのです。

私が今此所に来る迄に近道をして田圃の中を通つて来ましたが途中に先刻の句にあつた落水がサーサーと流れてゐる道端に赤のまま――犬蓼ですね――や溝蕎麦を見て虚子の句を思ひ出しました。虚子は此の頃小諸にいらつしやるさうですがその小諸で作つた句『溝そばと赤のまんまと咲きうづみ』と言ふのがあります。この句は別に何でもありませんが、赤のまま――幼い頃まま事によく使つたあの粒々の赤い花の赤のままが一杯に垂れ下る様になつて径を埋める様に咲いてゐる光景がよく味は

れます。この句から何だか御飯が盛られてゐる様な何か喰べてゐる様な感じさへ受けます。

一句句と言ふものは声を出して読んで見るのがよいのです。作者も恐らく句を作る時、口に出して作つてゐるに相違ありません。芭蕉も『舌頭に千転せよ』と言つてゐますが我我は一層大いに声を出して読んで見る必要があります。

『杓子菜か野沢菜か霜煙り居り』朝早く畠に霜が白く置かれて朝の光の中に煙つてゐる。ここは何うしても煙りではいけません。煙りです。煙つてゐるのではなくて煙つてゐるのです。

『逆まに樽置き上に冬菜置き』これも私達が日常よく見る光景に過ぎません。それを何の事もなく句にしてゐるの中には言ふに言はれぬ情味が印象が表現されてゐる事を味ふことが出来ます。又その様に味つて読むことが必要です。

落子さんの句に『蜻蛉の流れ分け行く膝頭』と言ふ極めて野心的な句があります。落子さんは皆様御存知の通り彼の膝頭はゴツゴツと瘦せてゐて白い。その膝で彼方此方飛んで廻つて他人の世話をしてゐたのですがそれを思ひ出すと蜻蛉を分けて行くと言ふ感じが実によく出て来るのです。今頃の蜻蛉は余り高く飛びません。低い所に群つて飛んでゐても中々飛び立つて逃げようとしません。蜻蛉の流れと言つたのは水の様で誇張であります。それが実によく生きてゐます。本

に落子さんらしい句であります。

又十志さんの句の『爽やかに大学朝となりにけり』と言ふのがありました。爽やかな秋です。大学の朝です。これは区役所の朝でも病院の朝でもいけません。小学校でも中学校でもいけません。どうしても大学である事が必要です。大学の構内、銀杏が植ゑてあるかも知れません。ドツシリとした建物、学問の府たるに相應しい建物、修学時代の思ひ出、なつかしい母校、その大学が今、朝になつた。爽やかに朝になつた。と言ふのです。考へて見ると大学の仕事は誠に大きいものです。『なりにけり』が又如何にも爽やかに効いてゐます。

『颯風の予報の路を母かへる』などもよかつた。この句は正木先生が直された様に矢張り道でなくて路がよいです。予報が出てゐる空模様の下を帰つて行くお母さんの姿、段々陰しくなつて行く空、母は息子のことを心配してゐる。気にかかつてゐる空は人間の小さな問題には関係なく来るべき低気圧が迫り、颯風園内に入つたらしいが未だ顕著な陰しさが無い。何とも言へない。

艸人さんの『音頭とる裸男に秋日濃し』裸男、音頭、秋日濃し。私にはこの秋日濃しの感じがよくは判らないがこの感じが実によくつかまれてゐると思ふ。然し本当の俳人は何う見るか知りませんよ。私は詩人としてよいと思ふのです。

『幅広の諏訪の寒鮒見てたのし』山口青邨さんです。諏訪の寒鮒の大きい感じがする。

『盆の上鴨睡るさま齧かくし』齧をかくして寝る鴨の姿に盆の上に鴨が載つてゐる。到来物でもあるのでせう。盆、鴨、睡る、齧をかくして。この連想が昇つて段々に特色を与へる。感覚がそれを与へて呉れるのです。其処で一層完璧となるのです。

丁度約束の三十分の様です。皆様はこの療養所に居る時間を出来る丈秀れた日本文学の詩としての俳句を味ひ、作ることに研究される様、御勧めします。

(富士見高原療養所内句誌「白樺」。昭和二十五年頃か未詳)

雪の高原で

或時は波のやうな、或時は風にはためく幔幕のやうなひろびろとした運動で、一月の濃い吹雪が朝から此の高原を降りうづめてゐる。樹々に囲まれた森の家にきびしい冬を住んで、オレンジや灰緑色の地衣を点じた焚火を暖爐にさしこんだり、机の上の新らしい書物や大きなノートに向つたりしながら、障子をあけはなした座敷から硝子戸ごしに、降る雪のヴェイルを透かして高峻山岳のざれざれを眼に映す現在の私の境涯には、多事多端の都会の冬をそれぞれに生き味はつてゐる人達のそれとは違つた、又別種の生命感がある。その感じは孤独や寂寥を基調とはしてゐるが、しかし強くしなやかに温かく、僻遠に光つて存在の根を豊かにつちかふ不思議な力を持つてゐる。

る。今私はこの生命感を、永く求めて来た至上の幸、おのれに許された無上の富として享けてゐる。そして其れのますます深く大きく展開する可能性を、私の残余の生をとほして試みようとする。

この森の家の高い軒先から斜めに突きだして、青白い暖かい煙を吹雪の空間へもくもくと吐いてゐる暖爐の煙突。その丁字形をした薄い鉄製の円筒の上には、火熱の伝導やその輻射にも拘らず、今では真白な雪が厚く蒲鉾形に積もつてゐる。降りしきる雪と、目に見えぬ火氣と、氷つた枝々からまる煙の縞。この美しい矛盾が一つの新鮮な魅力をもつて私の注目を惹くのである。又私がその暖爐にくべる薪、それは荒いざらざらした膚をもつハンノキや、粉白色や薔薇色をした白樺や草紙樺の割木だが、それらの年老いた樹皮だの瘤だのにしつかりと着いてゐるさまざまな地衣の色も形も美しい。或るものは爽やかな灰緑色を呈して、もじやもじやと鬚のやうに伸びたり、小さいツノマツのやうに平たい枝を堅く細かく分かつたりしてゐる。又金色や薄墨色や淡い血液の色をして、あざのやうな、雲のやうな、或は余り輪廓がぼうつとしてゐるので夢の断片のやうにさへ思はれる斑紋を、樺の木の滑らかな樹皮に張りつけたり印刷したりしてゐる地衣もある。これらは人も知るとほりすべて菌類と藻類とから成る謂はゞ一種の複合植物であつて、一方は水分や無機物を供給し、他方は有機物の一部を提供して、外観では一体と見える緊密な共同生活を営ん

でゐるのである。そして斯くも微々たる物の生の在り方を原始の時代以来支配してゐる法則が、あの莊麗な星辰の宇宙を統御してゐる均衡や調和の法則と、その本質ではいさゝかの変わりもないと思ふ事は喜びでもあれば力でもある。

星の宇宙といへば、地には積雪がほのじろく、天は透明な藍黑色に澄みわたつた高原の夜に、零下八度から十度を測る氷を張りつめたやうな空気の中で、燦爛と照り輝いてゐる空いつばいの星を見ることが楽しみの一つである。わけても此頃の晴れた宵に、西北西の山の端から群がる星々を煙らせながら、記念碑か墓標のやうな形をした白光を噴き上げてゐる黄道光を見るのが楽しい。太陽の黄道に沿つて其の光を反射してゐる宇宙塵だろうと言はれてゐる此の天空の光の柱は銀河の流よりも明るく白く、塩尻峠の上に逆しまに立つた天馬の東、諏訪湖南岸の山をかすめてちらちら光る魚座あたりを根もとにして、其の先端をほとんど天頂を飾るすばるの宝石群まで届かせてゐる。そして太陽の沈む方向が毎日僅かづつ北へ移るので、それにつれて此の黄道光の基底の少しづつ移動するのがわかるのである。二三日前の夜だつたが、或る所での講演からの帰り道に、天文に興味を持つてゐる或る小学校の若い教師がまだ此の現象を見たことが無いと言ふので積雪の丘の上から西の空を指さして教へたら、「まるで何処か遠くの大火のやうですね」と感嘆して立ちつくしてゐた。大火。それもさうだ。然しその光

は真珠かプラチナに近く、その静かさは地球の極地の永遠の沈黙を想はせはしないだらうか。

私の家では浴槽にドラム罐を使つてゐる。

しかもそれが戸外にあるので、夏はともかく、厳寒の冬にはこれを初めて見る客の驚きと怪しみの、(そしてたまには或る無言の憐れみの)対象となつてゐる。然し何を怪しみ、何を気の毒がる事があるだらう。私達は今でも充分これに満足してゐるし、東京の家の檜とタイルのあの浴室は、もう六年の昔に戦火の灰と化してしまつた。「心は万境に随つて転ずる」のだ。しかも又屋外の風呂には風呂で取り柄がある。春は宵月、むせるやうな森の若葉と夜目にもしるき躑躅、石楠、山桜。秋は色さまざまな樹々のもみちに夕日の波。夏は燐光をひいて飛びちがふ螢、田圃からの蛙の合唱。そして凜々と氷る冬の今は、寒月の光に漂ふ富士・赤石の雪の峯々や間近かにおこる梟の声を、湯を満した円筒の中から見たり聞いたりするのである。そして此処でも又一つの楽しみは頭上の星を見る事で、私はあるベルセウス座の食変光星アルゴルの光の消長を、その二日二十時間ながしといふ週期を計算しながらもう幾度か此の野天風呂から、屋根のひさしと一位の暗い梢との間から観測したのだつた。

今年のやうに寒気が特別に強くて雪の多い年には、氷や雪に関連して冬の自然現象のいろいろ新しい事を見たり学んだりする機会が多い。さういふ現象をノートしたり撮影し

たりする事は、私にとつて既に単なる暇つぶし以上のものになつてゐる。朝早く森のそのの藪地へ行つて蓮華躑躅や野薔薇の枝をちりばめてゐる霧氷の形を調べたり、雪の斜面を転落する小さい雪球の残してゆく長い痕跡が、どうして何時でも規則正しい破線（……）を描いてゐるのかを考へたり、寂しい丘の間の厚く氷つた池の水に、誰も石などを投げたのではないのに麗綺な円い穴が切り抜いたやうに幾つもあいてゐるのを、池底から湧く比較的温暖い水の柱のせいかと怪しみながらカメラに収めたり、こんなふうにより日に日に続出する疑問や自然界のこまかい美を取り込んで、初心者の無智の野帳や、自然詩人のテーマの雑記帳を埋めてゐるのである。

つい一週間はど前だったが、夜半から翌朝にかけて軽微な不連続線が此の本州中部を西から東へ通過したらしく、古い積雪の上へ又新らしく雪が降つた。ふたゝび化粧をしなければならぬ白皚々の八ヶ岳連峯。その中腹から山麓へひろがる黒緑色の針葉樹林も赤褐色の唐松林も、朝はすっかり新雪の燐し銀に飾られてゐた。其日の午後だつた。私は森の家を出ると丘の上の県道からだらだと南へ降り、ハンノキの疎林のふちのひっそりとした日当りへ行つて、其処の雪の消えた枯草の中で一時間ばかり本を読んでゐた。たしかアンドレ・モーロワの「ジイド論」だつた。ところが不図顔を上げると、田圃を越えた向うの丘の松林の裾を犬のやうけものが一匹のつそりと歩いてゐるのが目に映つた。よく見るとそれは

紛れもない狐で、黒味を帯びた茶褐色の体に房々した長い尾、すづまりの尖つた顔に三角の木の葉形の耳。まさしく犬よりも野性的に、犬よりも孤独に、人間世界には縁無き者の不思議な静けさを身にまとい、私から百メートル足らずの所、雪の斜面が夕日の光を吸つてゐる赤松林の下の小径を、何か物思はしげに歩いてゐる。私はもう此の高原に五年住んで、栗鼠や野兎ならば別に珍らしいとも思はず見てゐるが、狐はこれが初めてである。山野の森や藪地が年を逐つて伐られてゆき町や村里の響が次第に身近かに迫つて来て、その栗鼠も野兎もだんだん数少なくなつてゆくのを歎息してゐる矢先に、我家の近くにこんな野獣の出現を見ることは嬉しかつた。かういふ事のあればこそ、故郷の東京を離れて遠く暮らしてゐるのではないだらうか！ 私は驚きよりも寧ろ喜びの胸のときめきと、一種の敬意と讚美の念をもつて身じろぎもせず彼を見守つてゐたのである。松林をうづめた積雪を背景に、西の山の端へ傾いた冬の太陽の薄赤い光線を正面から浴びた狐は、孤独者の威厳と野性の者のメラニコリックな品位とをもつて、ちよつとの間立ちどまつてじつとこちらを見てゐたが、枯草の中にすわつて身をかがめてゐる私には気がつかず、やがて丘の切れ目の暗い小径の陰へゆつくりと入つて行つた。

此の狐を見てゐる間に思ひ出したのだが、それより尚一週間ばかり前、隣の農場の若者が、朝早く鶏舎から一羽の白色レグホンを啗へて立ち去つて行く一匹の狐の姿を見たさうだ。それで大声に「畜生！ 畜生！」と怒鳴りながら雪の畑の上を追ひかけて行くと、狐はたうとう獲物をはうり出して逃げ去つた。鶏はしばらく気を失つたやうな様子だったが、結局傷一つ負はないで、元どほり元気になつたといふ話である。それとこれと、或は同じ狐だつたかも知れない。

そして高原の冬の片隅、夕日に染まつた雪の松林に、人に追ひ出されたのでない、飼はれたでもない、全く天然のまゝの平静な彼の姿を見た私は、「此の狐、これからはどうか私一人にだけ現れるがいい！」といふ一句で其日の日記を結んだのであつた。

（「山」昭和二十六年四月号）

富士見の夏草の果てに

（八ヶ岳）

エミール・ジャベルがレマン湖畔のブベールの町からダン・デュ・ミディを見て暮らしたように、ギド・レイがブルイユの谷の村から日夜マッターホルンを仰ぎ見たように、私もまた信州富士見の高原から、七年間の四季を通じて、あの八ヶ岳をわずか三里の眼前にしていた。

十年という歳月、それは人がもしも若ければ、世路かりその遠望として忘れて、あるいは惜しむところのないものであろうが、当時までに五十を越して深刻な晩年を生きる私に、それは意味に満ち、物に満ち、人生の光と陰にみちみちた、重たく多彩な、いとも彫

り深い時間であった。そして人間私の内と外との営みの時の波間に、八ヶ岳は超然と厳然と、そのいっそう高い運命の輝くひたいをぬきんでていた。

昭和二十一年の燃えさかる夏、烈日の下で慰めもなく荒れつくした被占領地の首都をあとに私は追われるように南信濃の一角にたどりついた。安山岩と花崗岩に揺るがぬ国、山と湖の清涼な地、白カバがそよぎ、つつじが燃え、茂る羊歯の下かげに玉のような泉がむせんでいた。青い空気のひろがりに郭公が鳴き、黒つぐみが歌い、人は高原の田圃に田草を抜き、すべての農家が昼もひっそりと蚕を飼ひ、釜無の溪流に岩魚がおどって、早瀬の水がシューベルトの「鱒」を歌っていた。そぞろ歩く小道の果てはことごとく山のながめで、八ヶ岳はもとより、蓼科、霧ヶ峰、入笠、釜無、甲斐駒、鳳凰、富士、金峰、さては震動する夏がすみの奥に、なつかしい曾遊の昔をおもわせながら、あわれ槍や穂高の北アルプスが影絵のように浮かんでいた。

四周まことに旧山河。きのうまでの幾年が夢のようだった。私にとつての曾遊の□の山。八ヶ岳もまたその一つで、三十年前、ある若い友人に案内されて最初の経験をしたのを足がかりに、その後の多くは単身で、主峰赤岳、横岳、硫黄、阿弥陀とありあまる高峻の空気がアルペンフロラの世界を味わった。晴天に、濃霧に、雷雨に、その時どきの体験があり、その体験が喜びにつけ苦しみにつけすべて豊かで美しく、永存をねがう記憶がい

くたの詩や文章となって定着した。登山の初心者私にとつて、八ヶ岳こそはまず最初の道場であり、雲表への入門の階段だった。

しかし、やがてその山に日夜を□られ□められて、ここに余生七年を送るなどとは、詩人私のどんな予感にも浮かばなかった。

富士見高原のこんもり茂った森のなか、ある人の好意にあまえて借りた広やかな別荘、木の間から空がのぞき、山が見え、さびしい程の静けさが、その小天地に張りつめていた。樹下の清水、ささやく木の葉、鳴きしきる小鳥、それが森林の静寂をいっそう深めた。青い柔らかな松の実やくるみの皮を食いこぼしながら、こずえからこずえへと可れんな栗鼠が飛び移っていた。きのこや朽木のにおいのする森の奥のわき水のあたりから、赤い、うびんの雨ごいの声が響いた。ひがら、黄びたき、黒つぐみ、赤げら。東京へ帰って後もしばらくは耳につき、今でさえも記憶の中で歌わせることのできるのは、森じゅうに響く彼らの愛と喜びの叫びである。そういう中で私たち夫婦の心の痛みが徐々にいやされ、荒地の片すみを開墾して畑をつくり、ライ麦を収穫し、豆を採り、草花を咲かせ、農事暦を書いた。やがて私に多産の一時期が来て、せきを切ったように詩ができ、文章ができ、翻訳ができた。それは私にとって生涯に二度目の開花季だった。

私たちの救いの地、第二の故郷、その信州富士見の夏草の果てに八ヶ岳は立っている。一望の高原は白い断層とそよ吹く風のコンチ

ェルト。青い大気のを分けて、山の楼閣、赤と緑の八ヶ岳がなつかしくも立っている！
〔東京新聞〕昭和三十五年六月十八日 夕刊

高原にて

私は、長野県諏訪郡、八ヶ岳の古い火山列が広々と西へ曳いた裾野の一角、俗に富士見高原と呼ばれる海拔一千メートルの高地に住んでゐる。家は一つの大きな森の中にある。森は赤松、ハンノキ、白樺が主で、その他さまざまな種類の喬木や灌木がこれに混じって、幾里を波うつ開墾地や草原の風景の中で、遠く望めばあたかも緑の離れ島のやうに見える。家は古くて大きい、其のすべてを私達夫婦が占めてゐるといふ訳ではない。母親に息子二人の静かな一族が同じ屋根の下に住んでゐて、家の持主が東京へ移つてからは、これら今では唯一の隣人である。

風の響や小鳥の声のほかには時折の汽車を聴くぐらゐの静かな毎日。世の中のすべての雑音を高原の起伏や植物の繁茂にさへぎらせて、停車場の在る町へは十数町、開拓農家のいちばん近い家へも畑道を三町、そして私達の生れ故郷の東京とは五十里の青の空間をへだてゐる。

一足森を出はづれ、ば言ふまでもなく眺めは大きい。八ヶ岳の火山は十幾つの山頂をほとんど一直線にならべて、美しい兜のやうな

蓼科山まで、遠く東から北へと蜿蜒六里の長壁を形づくつてゐる。その左に、塩尻峠の弓がたの垂るみを越えて、残雪をちりばめた燕、大天井、常念、槍、穂高などの日本北アルプスの連峯が、今日のやうな初夏の日には遙かな沖の波がしらのやうにひらめいてゐる。また西から南へはすぐ目の前に横たはる女性的な釜無の山脈と、いかめしく気品のある岩峯をたてならべた甲斐駒ヶ岳と鳳凰三山。そして更に南東には甲府盆地の青みがかつた銀いろの霞の上に、裏富士と呼ばれて其の北面を見せた富士山が、鮮やかな雪の笹べりで飾られながら、最も均斉のとれた偉大な円錐形を浮かべてゐる。

かういふ土地に暮らして、もう六年が私に過ぎた。野山の自然が好きで、其処に自由な生をいとなむ生物が好きで、大空の雲の消長や夜の天体の整然と秩序のある推移を眺めて飽きる事を知らない私は、まことに住むに処を得たと思つてゐる。そのうへ人々は私を厚遇し、男女の若い人達はもとより、老人から子供にいたるまで私に親しんで、心置きない交はりの糸を結んでゐる。そしてかういふ親しみは此の土地から諏訪郡の村々町々にひろがり、今では塩尻峠を越えて伊那や安曇や木曾の谷へ、また野辺山の原を越えて南北佐久の郡にまで点々と及んでゐる。生れ故郷の東京に寄せるひそやかな思慕や愛情に変わりは無いが、本州中部の山岳地帯、この信濃の国の人と自然とに縁あつて深く契り、日に増し裸になるまことの心を与へながら、私はもう此

処を自分の第二の故郷のやうに生きてゐるのだ。

まだ私にとつても青春であつた数十年前の真夏の或る日、生れて初めての八ヶ岳の登山に、あの硫黄岳の頂上から見おろした絵のやうな此の裾野。やがては此処に自分の晩年の、静かに燃える落日のやうな生を托する事になるなどといふ事を、神ならぬ身の私にどうして考へ得たであらう。もしも言ふならば、これこそ「運命の愛」である。差し出された何本かの籤の中から此の一本を抜くやうになる道を、自分では知らずして、しかも本能的に遠く辿つてゐたのかも知れない。

高原の初夏の朝、夜はすっかり明け放れたが太陽はまだ出ない。露にしめつた森の樹々が灰いろを帯びた新緑の葉を重たく垂らして、樹下の藪も草地もまだびつしりと濡れてゐる。家のまはりにも小径の上にも一脈の睡さが漂ひ、一夜の夢のなごりのやうな柔かい寒い霧が高い赤松林の針葉の間にもつれてゐる。しかし小鳥達は早起きだ。彼等はまだ黎明のほのぐらい空に大きな星の消えない一時間半も前から目をさまして、自分達のめぐりに近い枝で歌つてゐた。午前四時前、裏手の丘のあたりで先づヨタカが鳴きはじめた。連続的に鞭を鳴らすやうな、いつまでも続く単調な声の流れだつた。それが終つて暫らくすると遠い開拓部落の方から雄鶏の勇ましい喇叭の音が響いた。やがて森の中の私の家のまはりでも、囁きのやうな、水のせゝらぎのやうな、

まだ意味を成さない囁りが波立ちちがはれた。それはコカハラヒワ、コムクドリ、コサメビ

タキ等の起床時のおしやべりだつた。その内に相次いで目を覚ました他の鳥達の声がこれに加はつて、囁きは歌になり、せゝらぎは分解してそれぞれ明瞭な輪廓を際立たせた。小さかつた多音の管絃樂が大声になつて、各楽器の音色やメロディーがはつきりして来た。アカハラのクラリネット、クロツグミのフルート、キビタキのピッコロ、ヒガラのトラライアングル、シジウカラのヴァイオリン、センダイムシクヒのヴィオラ、キジバトのチェロ、其の他ホ、ジロ、アラジ、サンシヤウクヒ、アカゲラ、コゲラ、エナガ、キセキレイ、スズメ等がそれぞれの楽器をもつて参加して、今朝もまた此の森に早朝の一大オーケストラを奏し初めるのであつた。

そして今六月の太陽は、八ヶ岳の空をまばゆい水仙いろに輝かせながら其の嶺線の歯がたをゆらりと離れる。真赤な光線が厚い新緑の森をふかぶかと射とほす。其の光線に、枝や葉むらにまつはり着いてゐた寒い霧が暫らくは赤と銀いろの縞模様を為がいてゐたが、やがてそれも全く消えて、空も森も、樹々の間から遠く望まれる風景も、もう完璧な朝になる。

私の足もとではチゴユリの群落が小さい白い花をうつむかせてゐる。

びつしり生えた紅花の一葉草が、若緑の葉の間から珊瑚色をした花の穂を何百という程立てゝゐる。

森のふちから甘い野薔薇の花の香がにほつて来る。小鳥はもう歌をやめて朝の食事に散つたらしい。向うの丘の空で雲雀が囀つてゐる。何処かで郭公の音がする。

週間日の朝から午後一時の昼飯までは、私にとつて貴重な仕事の時間である。此の静謐と充実との五時間だけは、外出の用事や来客のために乱されたくない。私は北向きの裏座敷へ引きこもる。仕事の部屋はあまり明るくないのがよく、精神の集中のためには外の眺めも美しかったり賑やかだつたりしない方がいい。此処へはあまり書物も置かない。画も懸けない。素朴な机一脚と、文房具と辞書。硝子戸のそとは森の中の狭い空地。ミヤマニ

ガイチゴの白い花が咲き、赤松と櫟が壁のやうに立ち、其の梢に真青な空の一角が見える。それでも此の空地ではクロツグミの夫婦が、雛のために餌をあさり、大木のアララギの幹にはキビタキが巢を営んで、絶えずひつそりと出たり入つたりしてゐる。花を見たり鳥を見たり、庇と梢との間の空を行く雲を見たりして、その度に気を取られてゐては仕事は出来ない。私は視線を宙にさまよはせながら、浮かんで来る落想や連想の渾沌から取捨選択して紙の上に定着させる。しかし決して一篇の詩、一つの文章にも完成の時といふものは無く、筆を擱いた時が放棄の時だといふ事にがにがしく承知しながら。

そして此の密室での苦しく楽しい仕事が一段落つけば、私はみづから解放して外へ出る。

歩く場所、見る物は到るところにある。山々は晴れていよいよ青く、野は点々とレンゲツツジの朱や樺色に彩られてゐる。私は臂にカモシカの敷皮をぶらさげ、ポケットに小型の双眼鏡を入れて野道を進む。あの丘の窪地には野花菖蒲が今は盛り、あの遠い山畑で働いているのは何処の誰。そんな事を知りつくしながら、其の知りつくしたもののから新らしく発見するのが、老いて尚若くてゐられる此の生活の一つの推進力であるかもしれない。

〔新女苑〕昭和二十七年七月号

高原の詩人 尾崎喜八

関連資料

〔新女苑〕昭和二十七年七月号より

詩人尾崎喜八先生が、奥様と二人、ここ信濃八ツ岳山麓の富士見高原に移られて、もう六年になる。白樺、赤松、榛の木などに囲まれた森の家、分水荘は、昔、明治天皇が御巡行の砌り、お泊りになられたという由緒のある家で、これらの林を透して、背後には八ツ岳、正面には釜無、入笠、霧ヶ峯など次々に美しい連峯を眺めることが出来る。

先生の一日は、森に棲む沢山の小鳥の囀りに始まる。すっかりお馴染みになったキビタキが、今朝もオレンジ色の胸を張って、竈のへりまで下りて来た。

食事がすむと、柱にかけられた気圧計、湿度計、温度計を見、それからラジオを聞いて、今日の天気図を掬える。天気がよくれば、背負籠を背負い、双眼鏡を持って気ままな散策

を楽しまれる。ゆきすがりの村の子供たちが「アレ、尾崎先生だよ」と丁寧に挨拶する。野良の遠くから「先生！」と声がかかる。先生のまなざしが親愛の情をこめて返事をかえす。

分水荘の裏手にある緬羊の牧場を抜けて、ハイランドと先生が名付けた草原を右に見ながら低い尾根を下ると、道は甲州街道を横切つて、自然に松目部落に向つて登り坂になる。道の傍には、春は、すみれ、れんげ、つつじが美しく咲き、落葉松林の緑は陽に冴え、やがて、堰の畔に胡桃の梢が蔭を落す。そして、それら自然の成長は、ポケットにしのばせた小さな赤いノートに克明に記入される。

道に疲れ、ば、陽蔭のやわらかな草むらに腰を下し、背負籠に入れた竹笛を出して、好きなルビンシュタインやヘンデルを、遙かな空に向つて吹き鳴らす。

子供たち、お百姓さん、青年団、学生等、尾崎さんはどんな不便もいとわず、喜んで講演に出かける。「語学を勉強して下さい。信州のお百姓さんが仕事に疲れた時、フトコロから原語のジイドやフランシス・ジャムを出して読むようになれたら、どんなにこの国は素晴らしいことになるだろう。私だって、独語、仏語は独学でした」。尾崎さんの力強い励ましは、恵まれない篤学の青年に大きな希望を与え、あらゆる人に深い感動を与える。先生をしたって、遠く東京から、又、近くは高原療養所の人たちが、ここをオアシスと称んで訪れる。

しかし、高原の生活はさびしい。そして、その時のために、本棚には敬愛するデュメルやヘッセやロマン・ロランが待っているのである。先生は今年還暦。東京京橋の生れ。「新女苑」昭和二十七年七月号・グラビアページに、安田勝彦氏撮影の六葉の写真とともに掲載。執筆者は北原節子氏。写真キャプションとして「白樺の林の中で アオゲラやコカワラヒワの声にふと足をとめる」「閑静な書齋で読書を楽しむ」「森の家・分水荘」「共同作業で開墾する松目青年団の若い人々と」「村の青年たちは尾崎先生との団欒をなによりも愉しみに待っている」「寂寥のひとつとき笛を吹く」とある。

農村と協同精神

町 田 梓 楼

*関連資料Ⅱ

信毎農業技術表彰会が年を重ねていよいよ成果を挙げつゝあることはうれしい。七月五日行われた第三回表彰式の席上、審査長笠原県経済部長の審査報告の総評に、「何等かの原因によって一時的苦難に遭遇した場合、青年を中心として友愛、協同の精神を奮い起して責任感と義務実践をもつて推進している」とあるは特に注目すべきである。また今年特選に査定された諏訪郡富士見村の松目農業実行組合、一等となった下伊上郷村の丹保農事組合、二等の下高平穂村の吉沢農家組合をはじめとして、各部落とも総じて「特に婦人層の自覚が急速に高まって来て、生活文化の向

上に目ざましい活動を示し……」とあるは誠に喜ばしいことである。農業技術表彰会の直接の目的は、農村生産の増進にあることはいうまでもないが、同時に農民の生活水準を高め、文化の向上に寄与することが望ましいのである。

七月五日の表彰式後、松目農業実行組合の代表に、「尾崎さんがよろしく申されました」といわれたとき、私は始め見当がつかなかった。フランスの有名な劇作家ヴィルドラック氏が日本に來遊したのは二十数年の昔である。詩人尾崎喜八の名はフランスの劇作家にも親しまれたと覚しく、私も時々尾崎氏のことを聞かされたものだが、その尾崎さんが、ずっと前から松目に住んでいることを知らずにいた。笠原審査長の松目部落に関する報告中に「生活、文化の面においてこの部落の特異とすることは、二百年の伝統を持つ儒教（時中舍）の運動を近代化して、生産と生活の深味を発見し、農民生活を楽しむ態度である」と述べ、「詩人尾崎喜八氏がこの村に住んでいるので、その指導を受けて全部落で俳句会を作り……」とあるのを見て、私は驚きもし喜びもしたのである。詩に縁遠い私と尾崎氏との関係はフランスの作家を通じてのことである。その尾崎さんが今郷土の一部落に落着いて、青年の指導に詩人らしい意義ある生活を楽しんでいることを知り、松目部落の特選また偶然ならざるを感じたのである。

こゝに、松目農業実行組合の「句集」第一号がある。尾崎さんの序文の一節に「……単に

俳句の好きな人が多数いるとか、上手な人がいるとかいうだけのことならば、このさい私には大して問題ではない。問題はひとつの部落の中に芸術を愛し尊重する気風が存在して、それが大部分の人々の生活を養い育て、一方ではさまざまの協同の事業を円滑に実行させる力となり、また他方では部落の風格に情操の美をそえているというところにある」とある。詩人の言葉は味うべきである。私はこれまでい／＼な国の人間と交った。現在多くの国から怪物のように見られているロシヤ人の中にも交友があった。そしていつも、どうして日本人はもっとのんびりしないのだろうか。どうしてこんなにとげとげしいのだろうか。考えるのである。日本の中でも、ことに信州人は角があり、言葉までがうるおいに乏しく、おたがいに良いところを盛上げようとせず、引きずり落すようなことが好きだといわれる。こういう信州人の性格を観察して、ある人は藪買いに禍いされたせいだという。隣家の藪より高く売りたい欲が手伝って相場をひたかくしにかくすことから、おたがいの間に反目が生じ、いつとなしに協同の精神や助け合う温い心がなくなったのだというのだ。それも一つの原因かも知れない。もっと一般にいわれていることは、徳川幕府の政策である。小藩対立の時代が長かったために、他藩とのつきあいがうとく、心をゆるさない習いが性となったのだという。しかし幕府にそういう政策を取らせたのは、信州の天然の地勢が然らしめたことを思うと、信州人の気質は自然の

致すところだということになりそうだ。今は理屈をこねている場合ではない。源がどこにあるにしても、悪いことは改めねばならない。一人の力で出来上ったと見える仕事でも、実際一人だけの力で成ったものはないのだ。学問や芸術の世界では、一人の天才はたれの力もからずに育成されると見えるかも知れないが、下地がなければ決して天才は生れない。血のつながり、環境の力、人と人との協力、文明の交流などの結晶が天才を生み、新しい天地を開いて行くのである。

農業技術の進歩改良の如きは特に然りだ。表彰会がある篤農家一人の努力や功績を表彰する代りに部落の成果に重点をおくのはそのためである。国民の協同精神というようなものは、短い年月で養われるものではない。何かの要綱などで一日にして育成されるものではない。

*関連資料Ⅲ

尾崎喜八と信州・富士見

昭和二一・二七年の交流記録

嘉納忠明

昭和二一年

6 富士見転居準備に入る

9 諏訪郡富士見村富士見に入転 喜八

五四歳、実子四一歳

*この年、中山政市、高橋達郎、伊藤海彦、三輪誠ら知る

昭和二二年

6・32 日本山岳会信濃支部発足 喜八参加。

この頃より高山忠四朗と親交を深めることになり、ウエストン祭を信濃

はない。實際生活の中に識らず知らずの間に育つのである。また、そうでなければ、身についた健全な精神にはならない。松目部落の「句集」を見て感じることは、尾崎さんのいう通り、「句の上手下手はむしろ第二義の問題」であることだ。尾崎さん自身すでに本職の俳人ではないが、俳句も詩の一つの形である。心は同じである。同じ意味でこゝに転載するのも句の優劣を評するためではない。部落の人のおのの生活をしのぶよすがである。純潔を誓ひ若草ふみ帰る。

入学の子供のひとみまっすぐに。

お隣へうどうの初切り子に持たせ。

ねこの顔うつる沼水ぬるみけり。

手をふれば手をふり答え表をふむ。

〔信濃毎日新聞〕昭和二十七年七月十四日

支部で例年主催すること等、帰京後
も応援する

7・12 入笠山登山、河田楨、村井米子、坂

倉登喜子、中山政市、高橋達郎他同

行

11・22 講演、読書週間記念講演会（諏訪・

片倉館）

*この年頃から活動を始めた詩誌「湖畔詩人」（小口幹夫ら）を応援

*この年になると、村の青年や教員達

を知り、諸所から講演を頼まれるようになる

昭和二三年

3 菊岡久利を介して、諏訪の詩誌「つめくさ」（地人塾）を応援するように

なり、この号より寄稿する

3・31 『高原暦日』（諏訪・あしかび書房）刊

行

5・2 諏訪湖北岸の山を三輪充武と歩く

5・29 詩人尾崎喜八を囲んで初夏の高原を

語る会（富士見高原の文化団体、白樺の集い）

6・11 講演、日本山岳会信濃支部発会一周

年記念講演と映画（松本高校講堂

6・12 第二回ウエストン祭参加

6 西穂高登山、高橋達郎、白崎俊次同行

6・20 『美しき視野』（東京・友文社）刊行

7・末 朝比奈菊雄を知る

7 座談会「ハヶ岳と周辺の山」に出席

（『南信日日新聞』7・31〜8・3）

9・10 『花の復活祭（ロマン・ロラン）』（諏

訪・あしかび書房）刊行

昭和二四年

2・20 講演「信州人は知的素朴」、原村中

新田青年団文化部講演会（要）

4・10 地藏寺での諏訪探鳥会（小平万栄・

平林良英）に参加、話をする。これ

以後会員になる

5・15 諏訪探鳥会（蓼ノ海）参加

6・6 釜無山登山、白崎俊次、中山政市父

子同行

7・27

講演「現代詩論」、日本出版協会信
越北陸支部主催・信州夏期大学現代
詩講座(長野師範講堂) この日、草
野心平と会う

7

ハヶ岳・阿弥陀岳登山、高橋達郎、
白崎俊次同行

9・23

講演「自然と文学」、岡谷南高校、
(原)

9・25

日本山岳会信濃支部、横有恒氏の後
を承けて第二支部長になる

10・31

瑞牆山行(国体登山特別参加)

11・19

講演「自然と文学」、にはうめ文芸
講演会(伊那北高校)(原、要)

11・27

講演「自然への親しみ」、松本電鉄
山岳部発会(松本高校講堂)(原)

12・3

講演「自然への愛と郷土」、南諏訪
六ヶ村社会教育会(富士見小学校)
(原)

12

原村中新田青年会会歌作詞(決定稿)
*この年から「白樺」(高原療養所・白
樺句会)を応援する

昭和二五年

1・14

講演「ベートーヴェン」、伊那北女
子高校 この日「ヴァイオリン協奏
曲」を併せてレコード鑑賞する。尚、
この年他でもベートーヴェンを講演
しているが、彼の生誕百八十年周
念に寄せたのであろう

3・4

講演「ベートーヴェン」、松本市清
韻会(松本音楽院)(原) この日、豊
田耕児少年のヴァイオリン独奏あり

5・5

講演「諏訪の子供」、PTAの会(下
諏訪中学校)(原)

7・9

第四回ウエストン祭、講演「登山者
の詩精神」

7・12

講演、信州大学教育学部学生

7・20

講演「生活の中の詩」、諏訪町村婦人
会長(上諏訪)(原)

8・15

講演「ベートーヴェンの人間像」、
地人塾(「つめくさ」)主催(諏訪・
関ホール)(要) この日、谷川徹三

8・20

「第四次元の芸術」を話す。この地
方では稀な大盛會
ロマン・ロラン友の会諏訪支部発会、
原田勇・尾崎喜八を囲んで話、喜八、
ロランからの手紙を朗読

9・30

常念岳登山、国体登山部門長野県予
選会

10

富士見連合青年団団歌作詞

10

宮川村母の会で詩朗読

*新築後の村役場で文化祭があり、喜
八は賛助出品するとともに解説や詩
の朗読をする

*この冬頃から松目の俳句会を応援す
る

昭和二六年

2

喜八を中心に集まった教員達の星雲
詩話会が「星雲」を出す。この号に
寄稿する

3・25

ロマン・ロラン友の会諏訪支部座談
会、「花の復活祭」を朗読
諏訪探鳥会(上川川原)参加、座談

会出席

5・28

講演「詩について」、東筑教育会中
部支部総会(塩尻小学校)(原)

8・12

ロマン・ロラン友の会諏訪支部・地
人塾共催講演会(諏訪・城南小学校)
で挨拶と詩朗読。この日の講師は草
野心平―高村光太郎について、片山
敏彦―ロマン・ロランとヘルマン・
ヘッセ

9・15

『碧い遠方』(角川文庫)刊行

10・27

第六回国体(大山国立公園)、役員
同行

11・30

講演「生活と芸術」、塩尻町文芸の
集い(役場)

昭和二七年

2・22

講演、ユネスコ協会(上諏訪)

2・24

諏訪探鳥会(穴山)参加

4・6

日本山岳会信濃支部長を辞める

4・27

尾崎氏を迎えて音楽座談会(松本音
楽院)

5・15

『尾崎喜八詩集』(創元文庫)刊行

5・31

講演、北部教育会(古間中学校)

7・5

第六回ウエストン祭、講演と詩朗読

(「山頂」?)

7・27

講演、諏訪市と諏訪山岳会共催 山
岳映画会と講演(諏訪・関ホール)
長野市浅川小学校校歌作詞

8・31

尾崎喜八還暦祝賀を兼ねて詩集出版
記念会(「つめくさ」)岩波篤雄・原
田勇発起人、諏訪湖ホテル、片山敏
彦の回顧談

茅野市豊平小学校校歌作詞

富士見を去り、東京都世田谷区玉川上野毛に移る

* 尾崎喜八先生還暦祝賀句会（第十五回種子蒔俳句会）

* この年に出た『松目句集』に「松目の俳句」を転載、これは「富士見時報」に寄稿したもの、月号不明、「富士見時報」は役場が発行したが、編集は村の若い人達の手で行われたらしい。

* 朝比奈菊雄の紹介により二四年以降高原療養所に入院中の小林義郎、山口耀久、川嶋利哉、川上久子、村松常男、加藤末彦、西野五郎らの度々の訪問が、二七年に富士見を去るまで続く。尾崎はこの集まりに穂屋野会（芭蕉の句から命名）と名付けて、亡くなるまで年に一度は自宅での集まりを持つ。

〔串田孫一氏の富士見への来訪記録〕

編集部から串田孫一氏に富士見へのご来訪の年月日をお伺いしたところ、早速にお調べ下さり、次の五回が、今のところ「判明した部分」とのご返事を頂戴しました。

昭和二年

6・28〜7・1（この時のことは「歷程」

尾崎喜八特集号に「日記」として掲載）

昭和二年

11・1〜3

12・13〜15（「図書新聞」取材）

昭和二七年

5・9〜10もしくは11（「新女苑」撮影）
10・7（八ヶ岳登山の帰途）

附記

尾崎の戦後六年余の信州富士見での生活は、時代・場所・人間関係等環境のあらゆる面で、生涯の中でも特異な彩りと陰影を帯びている。そんな当時の尾崎の文学と人を考える上で、別掲の書誌（発表）記録とともに、「信州（長野県）・富士見」との交流（活動）記録も欠かせないだろう。このことは尾崎の側からだけの問題ではなく、信州・富士見の文化運動を見直すことにもなるであろう。本表は未だ不十分ではあるが、判明分を以て編集した。

● 尾崎は作品の中でしばしば土地の人との交流にふれ、又、主題にもして、大方の輪郭は知ることができる。しかし、具体的記録の面では不足している点が多い。ここでは、それらを追認することにもなるが、主として、刊行物から記録性のあるものを収集した。ただし、単一資料によるばかりでなく、複数資料を総合したものもある。

● 尾崎の講演は、広範な地域や対象にわたり、回数もかなり上るであろう。ここでの記録の大半は尾崎自身の講演原稿にもとづくもので、現存する原稿（断片含む）の四分の一ほどである。他は、題目、時、対象等が不明である。（註、末尾記号（原）は講演原稿あり。（要）は要旨・記録あり）

● 書簡類も重要な資料である。公刊されたもの

のもあるが、目下、尾崎家で整理中である。

● 尾崎は、校歌、団体歌等の詞をかなりつくったと思われるが、目下富士見在住の名取正義氏が収集、整備中である。

● *印は、必要な事柄であるが、月日は未確認である。

● 本表からだけでも、尾崎と信州・富士見との関係がいかに厚かったかを窺い知ることができるが、この上は、より十分なものにするために、皆様方の資料収集のご協力をお願いしたい。

● この交流記録を作るために調べた参考資料の一覧表は紙面の都合で省く。



新聞・雑誌掲載目録(四)

昭和二年—三四年

* 印は未確認、調査中。
◆ 印は信州の出版物。

昭和二年

《詩》

「噴水—ガブリエル・フォーレのピア
ノ夜曲に寄せて」 蠟人形 9

「能登紀行(句)」 かびれ 9

「信濃住み(句)」 かびれ 11

《随想》

「大平原」 文華 9

《翻訳》

「野の花(マーテルリンク)」 文華 8

「詩—美しい雲(ヴェルアールン)」

文華

昭和二年

《詩》

「科野歌二篇—国土・秋の日」 蠟人形 1

「落葉籠(句)」 かびれ 1

「かびれ俳句」 かびれ 1

「冬の花抄(句)」 かびれ 4

「かびれ俳句」 かびれ 4

「近寒の花」 詩人 4

「エレミヤの覚醒・告白・詩心・本国・新しい絃」 歴程 7 (復刊第一号)

「彫刻二題—首・トルソ」 ◆ 青年演劇 12

《随想》

「信濃の春」 ◆ 夕刊信州 5・20

「ベアルンの歌」 蠟人形 8

「裾野日記(一)—イチキの実・秋の路傍・雨量計・或る日の観測から」 歴程 9

「秋深き」 旅 11

「童話」 ◆ 高原 12

《評論・感想》

「座談会—山とロマンス」 ◆ 夕刊信州 7・31

7・31

昭和二年

《詩》

「朝のひかり」 ◆ つめくさ 3

「詩業」 ◆ 青年演劇 5・6 合

「孤独者の春」 詩学 7

「曆日抄—蹄鉄工・国境にて・家畜小屋の前で・本村」 至上律 8

「夏野の花(ヘッセの或る詩へのヴァリアチオン)」 蠟人形 9

「或日の話」 ◆ 新詩人 9

《随想》

「音楽会の印象」 ◆ 信陽新聞 5・17

「背負子」 ◆ 日本山岳会信濃支部報 6

「紫ツメクサ」 ◆ 読売新聞(長野) 8・4

「西穂高」 ◆ 信州自治 8

「木母の時」 蠟人形 10

「初秋の数日」 旅 10

「秋の日記から」 ◆ 夕刊信州 10・13

「乾草刈の頃」 山 11

《翻訳》

「詩—月夜(リルケ)」 ◆ つめくさ 8

《評論・感想》

「老詩人のみた諏訪の女性と文化(談)」

◆ 南信婦人新聞(諏訪版) 23・5?

「座談会—八ヶ岳と周辺の山」 ◆ 南信 日日新聞 7・31

7・31

昭和二四年

《詩》

「夏の村落」 ◆ つめくさ 1

「信濃の新春」 ◆ 読売新聞(長野) 1・1

1

「南信元旦」 ◆ 信陽新聞 1・1

「待春抄(句)」 かびれ 5

「五月の牧場で」 サンデー毎日 5・15

「夏雲」 山と溪谷 7

「旦暮孤吟(句)」 かびれ 8

「花に包まれた田舎家」 ◆ つめくさ 8

「夏の小鳥が」 ◆ つめくさ 10

「夏霞の巻(歌仙—行人・波之)」 かびれ 10

「国土」 ◆ 日本山岳会信濃支部報 12

《随想》

「春の雲」 山 4

「泉」 塔 4

「蓼科高原」 ◆ 月刊信毎 4

「初夏の高原」 ◆ 信陽新聞 5・31

「山を想う」 ◆ 信濃毎日新聞 8・7

「草に寝て」 山と高原 9

「冠着」 ◆ 夕刊信州 9・11、12

「入笠山」 山 10

「秋の湖(新島章男君に)」 山と高原 10

「湖畔の星」 ◆ 夕刊信州 11・26、27

昭和二五年

《詩》

「十一月」 ◆ 高原文学 1

「雪の谷間」 岳人 3

「日立の巻(連句—行人・孤悠・爽青)」 かびれ 4

「伊那谷の春」 旅 4

「彼岸」 ◆ つめくさ 4

《随想》

「朴の杖」 新女苑 7

「春の美ヶ原(旧作)」 ◆ 旅と信濃 7

「開かざりし花」 ◆ 日本山岳信濃支部 報 7

昭和二六年

《詩》

「雨氷の朝」 岳人 1

「朝の光」 歴程 1

「山頂」 ◆ つめくさ 1

「新春述志」 ◆ 南信日日新聞 1・1

「山頂」 かびれ 2

「春の牧場で」 歴程 2

「夏の小鳥が」 ◆ 星雲 2

「或る晴れた秋の朝の歌」 歴程 3

「足あと」 ◆ つめくさ 4

「地衣と星」 アルビレオ 4

「復活祭」 新女苑 5

「トルソ(旧稿)」 アルビレオ 5

「杖突峠」 詩学 6

「黄ばんだものが」 ◆ つめくさ 10

「晩夏初秋(句)」 アルビレオ 10

「晩秋」 アルビレオ 12

《随想》

「碧い遠方から—二月の春・寂しさと桜草と・木いちこの時」 かびれ 1

「入笠小屋」 新ハイキング 1

「雪の高原で」 山 4

「五月上旬記」 アルビレオ 6

「詩人」 新潮 7

「祖父の日」 展望 8

「他人のみ知る真の顔」 ◆信濃毎日新聞 10・29

《翻 訳》

「わが庭の寓話(1)―純真の庭・ジャム・

ニューヨークの群衆・感傷的な散歩

又は青々とした贈物」(デニアメル)

新女苑 1

「わが庭の寓話(2)―放棄された蟻塚・

償いがたい損失・墓所の選択・蜜蜂

と蜘蛛」(デニアメル) 新女苑 2

「わが庭の寓話(3)―港での難破・ほん

やり霞む眼をした馬・節制の法則・

果実の神・コンヴォルヴエリユス・

名ベル・ド・ジュール」(デニアメル)

新女苑 3

昭和二十七年

《詩 》

「新詩抄」 歴程 1

「雪の高原で」 岳人 1

「新年偶成」 ◆南信日日新聞 1・1

「雪の浅間」 ◆信濃毎日新聞 1・1

「雪を浴びて」 新女苑 2

「高原浅春(句)」 俳句 6

「野辺山にて」 新女苑 8

「夕日の歌」 ◆つめくさ 8

《随 想》

「信州の正月」 ◆読売新聞(南信読売)

1・1

「焚火」 ◆新詩人 2

「山住みのたのしさ(談)」 ◆毎日新聞

(長野) 2・27

「高原にて」 新女苑 7

「ちよっとひとこと(談)」 ◆信濃毎日新聞 9・3

「わが青春記―運命を決したもの」 東京新聞 11・4

「初冬の別れ」 ◆信濃毎日新聞 11・25

「晩秋初冬の高原にて」 旅 12

《評論・感想》

「虚子俳句鑑賞」 俳句 7

「座談会―詩はどう作るか」 新女苑 8

「秋桜子俳句鑑賞―磐梯」 俳句 9

《翻 訳》

「詩―ランプ」(エドヴァルト・メーリ

ケ) ◆つめくさ 1

昭和二十八年

《詩 》

「雪原の朝」 旅 2

「予感」 岳人 3

「淡烟草舎(句)」 俳句 5

「甲斐の歌」から 山と溪谷 6

「山頂のねむり」 旅 8

《随 想》

「詩人の帰京」 新潮 1

「雪のしたの歌」 山と溪谷 2

「二月の周囲」 創元 3

「鳥を見る二人の男」 東京新聞 5・14

「初冬に思う」 東京新聞 12・8

《評 論》

「水原秋桜子『薩摩山菊』(書評)」 日本読売新聞 8・24

昭和二十九年

《詩 》

「連句三題―行人・叔子」 かびれ 1

「冬のころ」 いづみ 1

「林間」 アルビレオ 2

「雪の星月夜」 ◆日本山岳信濃支部報 12

《随 想》

「都会の冬と山野の冬」 旅 1

「末消ゆるころの波」 馬酔木 4

「復活祭」 学鏡 4

「木曾の奥座敷」 旅 8

「しぐれ」 ◆信濃毎日新聞 11・15 夕

昭和三十一年

《詩 》

「遠い分身」 岳人 1

「二十五年」 山と溪谷 4

「蛇」 歴程 6

「風景」 近代詩派 7

「岩雲雀」 いづみ 7

「立春―伊藤海彦君に・眼前の蜜蜂に」

アルビレオ 7

「西風の歌」から―女と葡萄園・目木

詩学 11

「葡萄の秋」 旅 11

「信濃を想ふ(文化の日に)」 ◆信濃毎日新聞 11・3 夕

《随 想》

「春の告知」 東京新聞 3・9

「国立自然教育園」 東京新聞 4・28

「五月の中央線」 旅 5

「夏山はあなたを魅惑する」 旅 3

「霧ヶ峰紀行」 岳人 11

「武蔵野晩秋」 東京新聞 11・17

昭和三十一年

《詩 》

「冬野(五五年度代表作集)」 詩学 1

「懐かしの信州元旦」 SBC ニュース 1・1

「老の山旅」 樹氷(帯広営林局局報)

3

「桃林」 文藝春秋 4

「四月の詩」 東京新聞 4・1

「針の木にて」 旅 8

「生ける君への四つの歌(その二)―マルティネに」 季節 10

「十一月」 婦人之友 11

《随 想》

「蝶によせる童心」 家の光 4

「五月の山にきく野鳥の声」 旅 5

「初めて会った日の高村さん」 新女苑 6

「高村さんとの旅」 文芸 6(臨時増刊号)

「信州の高原三景」 旅 9

「皇居に残る江戸」 東京新聞 10・6

「歳月のなすところ」 詩人連邦 10

「秋の日記から」 9・9・9・9・10・9・19・9・22 季節 12

《評 論》

「葉と風との世界」の詩人へ」 同時代 10

《翻 訳》

「散文詩二篇―カプツィーネルベルク・

ジュピター交響曲、附訳者註」(ピエール・ジャン・ジューウ) アルビ

レオ 3

「春の散歩」(ヘッセ) 歷程7

「ある登山家の哲学」(S・F・スマイ

ス) 山と高原10

「詩」女と囚人 季節12

昭和三年

《詩》

「正月のたより」 ◆信濃毎日新聞1・

1

「一つの美」家の光7

「八月」産経時事新聞8・1

「山荘詩篇」台風季の或る日から・秋
の林から・山荘の蝶・山荘をとざす

山と高原11

「雪月夜」(信濃大町) 山と高原12

《随 想》

「晩秋の日記から」11・5、11・6、

11・8、11・13、11・15 季節2

「ふたたびの春」光太郎氏の一周忌を
迎えて 東京新聞3・30夕

「春の思ひ出」(その一節) 山と高原5

「高村光太郎の手紙」婦人朝日7

「夏山へ」 ◆信濃毎日新聞7・3

「忘れ得ぬ牧場」旅9
「滅びかけた武蔵野の姿」東京新聞10

・24夕

《評 論》

「ジュール・ルナール」素朴な風景」(書

評) 日本読書新聞2・18

《翻 訳》

「アネモネ」(ヘッセ) 季節6

「詩三篇」私は真に偉大であった人々
を……ヘルダーリンの晩年・海景、

訳詩に添えて」(スペンダー) 季節

11

昭和三年

《詩》

「久方の山」山と高原1

「我等の民話」ハンス・カロッサへの
追悼詩「現代日本詩集」詩学1

「桃林にて」(1)、(2)、(3) 山と高原

3

「峠」アルプ4

「岩雲雀」アルプ5

「蛇」山と高原5

「溪谷」(I) 暗い日・(II) 或る結婚・

(III) 村にて」アルプ6

「風景」山と高原7

「木曾の歌」から「寝覚」アルビレオ

7

「木曾の歌」から「奈良井」(II) 鳥居

峠」アルプ7

「木曾の歌」から(III) 開田高原」アル

プ8

「上高地にて」第12回ウェストン祭6・

14 日本山岳会・会報8

「イメージ」文藝春秋9

「わが山々に」ケルン10

《随 想》

「心境」アルビレオ1

「晩秋」季節1

「高原の冬の思い出」アルプ3 (創刊

号)

「上高地の歌」東京新聞6・22夕

「山へ持ってゆく図鑑」週刊読書人

7・14

「上高地行き」読売新聞7・1夕

「妻とゆくウェストン祭」旅8

「詩に添えて」秋の歌」(曠野の火)」

山と高原9

「折れた白樺」アルプ9

《評 論》

「上田哲農」日翳の山ひなたの山」(書

評) 週刊読書人9・8

《翻 訳》

「動物譚と植物誌」(1) 季節5

昭和四四年

《詩》

「仲間」山と高原1

「元旦の笛」東京新聞1・2夕

「新春の信濃に寄せて」信濃毎日新聞

1・1

「二月の春」東京新聞2・1夕

「あかり」アルプ3

「春の前夜」東京新聞3・1夕

「受苦の金曜日」東京新聞4・1夕

「早春の詩帖から」春の前夜(藤木九三

君に)・眠られぬ夜に(安川定男君夫

妻に) アルプ5

「六月の詩から」華麗な片隅・朝のひ

ととき・転調」アルプ8

「車窓」いつみ9

「曇り日の村」家の光10

「秋」同時代12

《随 想》

「狐」アルプ1

「詩集に思う」詩人連邦1

「富士見日記から」131・2・10・叙述
的略年譜(尾崎喜八特集) 歷程3

「ベルシャ遺宝展をみて」東京新聞

11・11夕

「あの美しき若き心に」地上12

《評 論》

「河合亨・近藤等訳」光みなぎるところ

(ジョルジュ・ソニエ) (書評) 山

と高原8

「高田博厚」思い出と人々」(書評) 東

京新聞8・24夕

《翻 訳》

「ゴットハルトにて」(ヘッセ) アルプ

12

附 記

嘉納忠明

目録四は、尾崎が戦後六年余にわた
って移住した信州富士見時代と、帰京
して『尾崎喜八詩文集・全七巻』(創
文社)を刊行するに至った時期に当っ
ている(五四一六七歳)。

(1) この間の大きな特徴は、尾崎が
「二度目の開花季」(「富士見の夏草の
果てに」東京新聞S35・6・18夕)と
呼んでいる富士見時代(五四一六〇歳)
の活動にあり、生涯の中でも意義深い
その成果は一応『詩文集』に収められ
ている。ここでは目録の中から注目さ
れる点を挙げてみる。

●寄稿が長野県内の出版関係で半ば
を占め、新聞は全国紙であっても県内
向きの地方版が殆どである。これは東
京を離れた地理的条件の不利―単にこ
ればかりでないであろう―を示し、一
方では地元との関わりを表わすもので
ある。

●諏訪周辺の詩・俳句の会の応援。

ここでは文学青年や教員、老若男女の村民らと一般愛好者が主で、尾崎の人間交流を豊かにした。

●尾崎は戦前に於ても句作に親しんでいたが、この時期ほど多産したことはない。旧友坂本波之を介して俳誌「かびれ」(日立・大竹孤悠)に客員寄稿し、昭和二十七年に創刊された「俳句」(角川書店)には句や鑑賞文を寄せている。

●これらの点は又、尾崎の流寓の孤独の心を開放し、創作意欲を励ますことに少からず力になったと考えられる。(このことは一方で、尾崎の地元文化への寄与と関連するので、別表『尾崎喜八・信州・富士見』との交流記録』を併せて参照して欲しい。)

(2) 詩文集の刊行は、それまでの集大成―翻訳・評論感想類は除く―である。そして、新たな発展―晩年の結実を機するにふさわしいと考えられる。

(3) 昭和三十三年三月に、山の芸術誌「アルプ」が創刊された。尾崎もこれに加わり、終生応援することになる。

記号◆は長野県内で発行していることを示す。

目録・補遺

「女のトルソ・大煙突」(詩) 生命の

川大6・6

「不服」 読売新聞大7・5・7

「昔の楽譜に現代の楽器を加へる」(ペルリオ) 読売新聞大7・12・28

「詩に関する一断片」 音楽評論昭8・

7

「山岳文学」 国民新聞昭9・7・31

「高山植物雑感」 エコー昭9・8・*

「詩―バルチック海の霧の覚書・水牛

のたそがれ・ペンシルヴァニア

(カル・サンドバーク) 現代詩昭11

・5

「べにはないちこ」 東京朝日新聞昭

13・6・22

「フエノコドモ」(童話詩) コドモノ

クニ昭14・2

「内原の朝」(詩) 村昭16・5

「車窓のまごころ」(詩) 大和昭17・

10・14・*

「詩の鑑賞」 雑誌日本昭17・10

「母の幸」(詩) 主婦之友昭18・2

「少年航空兵」(詩) 日本婦人昭18・4

「富士と戦車と少年兵」(詩) 新太陽

昭18・6

「山本司令長官の戦死」(詩) 少国民

文化昭18・7

「古賀提督」(詩) 主婦之友昭19・1

「明くる東亜」(詩) 写真週報昭19・

11・29

「職場の文芸・詩―選評」 ちから昭

19・12・1

「職場の文芸・詩―選評」 ちから昭

20・2・1

「女のトルソ」の解題

「生命の川」(大5・10・6・6)は、

千家元麿、佐藤惣之助を主力にした「エゴ」(大2・11・5・1)の後継で、

「白樺」の衛星誌である。尾崎は両誌に寄稿し、「エゴ」には小説や戯曲、「生命の川」には小説とともに本篇の詩を発表している。

これに関連して、井上康文は「詩人回想録」(「若草」昭10・4)の中で、尾崎の詩は「カテゴリーメード」で認められたが、「生命の河」に「三本煙突」を発表したのが最初、と言っており、佐藤惣之助は「詩戯と懐旧―大正詩壇回想」(「詩神」昭2・3)の中で、「エゴ」の末期に、「詩」と銘打って千家も私も又尾崎喜八君などが揃って書いた、と本篇の存在を傍証している。

これまで尾崎の詩活動は「白樺」から出発(初掲載は大9・4)した、と一般に知られているが、本篇はそれ以前から試みられていたことを示すと共に、尾崎の初期を考える資料となった。尾崎はこの後も千家や惣之助達と交わっている。

ところで、このロダンの「女のトルソ」の詩因を尾崎はどこから得たのか、興味深い。ここではその詮索の跡は端折って結論的に言うと、それは実見ではなく、刊行物の挿画(或いは写真)からであり、種々の中でも、晴朗で生命感の漲った若い女の体軀を表わす詩の印象や発表時期、当時の高村光太郎と尾崎の関係等を総合して、光太郎訳編の『ロダンの言葉』(大5・11)に入っている、ほぼ正面体でアトリエで写した「九、胴体(習作石膏)」の挿画が最も近い、と考えられる。しか

もその後、『続ロダンの言葉』(大9・5)を光太郎と共訳することになっていたことから、尾崎のロダンに寄せる情熱が窺われる。これは「地獄の門」の一部で、別に「若い女のトルソ」としてつくられ、一九一〇年のサロンに出品され、ロダンの傑作の一つといわれている。

思えばこの大らかで明るい讃仰に満ちた詩と、戦後富士見で発表の「トルソ」とは、なんと違うであろう。(嘉納忠明)

◎尾崎喜八研究会会費値上げについてのお知らせ

「尾崎喜八資料」も皆様のお力により無事4号を数えることができました。また研究会の活動も、さまざまに広がりを見せております。それと同時に、「資料」誌の充実、また関連資料の維持、管理、普及という任務も、このささやかな研究会に要請されるようになってきております。

これら諸般の事情にかんがみ、この度研究会会費を値上げさせていただきます。いただきたく存じます。「資料」誌の現状維持、また各資料のコピー、保存などのための不可避的な値上げです。どうか会員各位のご了承のほどをお願い申し上げます。

◎会費 年間二千元

(昭和六三年より)

◎振込口座 郵便振替

横浜7-33012

尾崎喜八研究会

この一年のできごと

二月七日、生前親父のあった方々によって、蠟梅忌第十三回が東京青山の青山荘で行われた。司会Ⅱ伊藤海彦氏、お話しⅡ本日出版された『ベートーヴェン』の由来 高橋達郎氏、「富士見時代に教えられた気象の事」河角巖氏、「尾崎先生と科学」伊藤和明氏。音楽の捧げ物、フルート演奏Ⅱフルーティスト杉浦勝彦氏「エマヌエル・バッハの無伴奏フルートソナタ」「ドビュッシーのシュリンクス」。

参加者九十五名。

五月十日、長野県南安曇郡穂高中学校内で「田舎のモーツァルト」碑前の集いが穂高中学同窓会主催で行われた。尾崎の詩朗読の録音に始まり、地元から穂高町町長、参加者からは伊藤海彦氏の話、中学生のコーラス。全員で白馬連峰を眺めるグラント協で昼食会。参加者約六十名。

八月三十日、長野県諏訪郡富士見町高原の森で、第八回碑前の集い。富士見尾崎会の事務長をつとめ、詩碑の建立、記念誌の発行、尾崎会の運営を率先して実行され、七月十一日に急逝された河角巖氏の追悼も共に行う。司会Ⅱ樋口治久氏。お話しⅡ「関東大震災と尾崎先生の関わり」伊藤和明氏、「尾崎先生と高原中学」高原中学木川校長、「詩人の風土」古い感動と新しい発見 三輪誠氏。尾崎の詩朗読を録音で聴き、最後に全員で「森の子供の歌」を合唱。のち席を元公民館に移して昼

食会。富士見町町長の挨拶。参加者約百名。十月三十一日—十一月一日、群馬県多野郡万場町、西御荷鉾の文学碑を訪ねる。碑の建立者万場町永友会は全員夫婦同伴で、その他尾崎家は十八名参加。

「新刊のお知らせ」

数年前にフィリップス社からレコード『音楽への愛と感謝』が発売されたがその後廃盤となり惜しまれていたところ、六月二十五日CD盤で同社から発売された。

こぼればなし

関係資料「農村と協同精神」に松目部落の受賞について書かれているが、松目はこの他に農業・生活両面に互って種々の受賞をしている。父は戦時中北海道の寒冷地農業・ハケ岳修練農場等の視察に行っていて、寒冷地に於ける農業のあり方に興味を持っていたので、松目の青年達が耕作していた適性品種の実験の共同圃場を度々訪れては、その様子を見るのを楽しみにしていたようである。富士見という土地の気象の実態を自分達の手で観測しながら農業を進めてゆこうという青年達の考えに、おそらく我が意を得たりと協力の手をさしのべたのであろう。

賞の審査に副知事以下が松目を訪れた時にも、その農家の客人として老主人と共に、重要な箇所の視察の見落としがないかと眼を光らしていたり、審査の対象の台所改善以外の未だ見られては困る便所の前に何気なく立って、

戸を開けられないようにガードしていた等というエピソードも残っているくらいで、さぞかし熱をこめて応援し、お世話を焼いたのだろうと察しられる。(尾崎栄子 記)

編集後記

●『尾崎喜八資料』も今回で第四号になります。皆様のお力添えによってどうやら無事に『三号雑誌』の域を抜けることができました。これからもいつその内容を充実させるために力を注いでいきたいと思います。どうかご支援をお願い申し上げます。

●……三号雑誌を脱したのは良いのですが、四年間試してみても、現行の会費での維持が難しいこともわかりました。そこで誠に心苦しいのですが、今年より年会費の値上げをさせていただきますたく存じます。息の長い研究誌として育てていくための、やむをえざる値上げです。どうか御寛恕下さい。

●富士川先生からご指摘いただきました欧州の作家との書簡の整理・公開は、今後の大きな課題です。いずれ何らかの形で光をあてたいと考えております。今回は喜八の愛した土地、富士見の特集なので、他の所は大幅にセーブの号になりました。(石黒敦彦 記)

尾崎喜八資料・第四号

一九八八年二月四日発行・非売品

発行・尾崎喜八研究会

鎌倉市山之内一九七—五一(〒247)

電話〇四六七(二三) 一七六一

印刷・住友出版印刷